

# 学院史料

2025. 4. Vol. 38.

神戸女学院史料室

# 学 院 史 料

2025. 4.

Vol. 38

---

史料室のさらなる発展を祈念して…………… 藏中さやか(1)

特集：神戸女学院の歴史を振り返って

神戸女学院のキリスト教教育について

—大学のキリスト教科目の変遷を中心に—…………… 飯 謙(4)

神戸女学院岡田山キャンパスの自然史…………… 野 崙 玲児(12)

神戸女学院大学の英語以外の外国語教育について…………… 孟 真理(27)

神戸女学院中高部の英語教育—1933年4月～2020年3月—

…………… 林 真理子(34)

神戸女学院中高部の理科教育について……………大川 徹(41)

神戸女学院大学新学部、カリキュラム再編

新学部・学科の設置(2024年度、2025年度)…………… 中野 敬一(46)

文学部総合文化学科のカリキュラム改編について…………… 建石 始(51)

音楽学部のカリキュラム再編について…………… 松浦 修(56)

資料紹介

マンザナ収容所関連資料を紐解く

—第5代院長 C.B.デフォレスト先生の第二次世界大戦終局期の活動—

…………… 藏中さやか(61)

未来へとつながっていく神戸女学院の姿

—神戸女学院創立150周年記念展示II報告—…………… 佐伯裕加恵(71)

神戸女学院史料室所蔵文書目録

デフォレスト ファイル(13)…………… 富岡ひとみ(73)

# GAKUIN SHIRYO

2 0 2 5 . 4 .

Vol. 3 8

---

## Wishing for the Further Development of

Kobe College Archives ..... KURANAKA Sayaka( 1 )

## Looking Back of Kobe College History

On the Christian Education in Kobe College

—Focusing on Christian Studies at the College Division ..... II Ken( 4 )

Natural History and Biota of Okadayama Campus,

Kobe College, Japan ..... NOZAKI Reiji( 1 2 )

Foreign Language Programs Other than English

at Kobe College ..... MOU Mari( 2 7 )

English Education at Kobe College High School ..... HAYASHI Mariko( 3 4 )

On the Science Teaching of Kobe College

Junior and Senior High School Department

(Physics, Chemistry, Biology & Geology) ..... OKAWA Toru( 4 1 )

## New Schools and Curriculum Reorganization at Kobe College

Establishment of New Faculties and Departments ..... NAKANO Keiichi( 4 6 )

On Curriculum Reforms of Department of

Intercultural Studies ..... TATEISHI Hajime( 5 1 )

Reform and Reorganization: Faculty of Music

and Curriculum ..... MATSUURA Osamu( 5 6 )

## Review: Introduction to Materials

Related to the Manzanar War Relocation Center .. KURANAKA Sayaka( 6 1 )

## Report: Memorial Exhibition II of Kobe College Sesquicentennial

..... SAEKI Yukae( 7 1 )

## A Catalog in Kobe College Archives

DeForest File (XIII) ..... TOMIOKA Hitomi( 7 3 )

---

## 史料室のさらなる発展を祈念して

藏中さやか

2024年、第5代院長 C.B.デフォレスト先生が“Beauty Becomes a College”（美は学び舎にふさわしく）という詩の中で「神の創りしものと人の作りしものは輝く全体(ひとつ)のものとなる」（原田園子氏訳）と表現した岡田山キャンパスは90周年を迎えました。この岡田山キャンパスはウィリアム・メレル・ヴォーリズ（William Merrell Vories）氏の設計により17棟が一括して建てられました。そして2014年には、第二次世界大戦や阪神淡路大震災を乗り越え現存する12棟が、重要文化財に指定されました。神戸女学院は、この大切な建物群を、遠くから眺めるものではなく、日々の教育の場として活用しています。

ヴォーリズ氏は「もしもこの建築が真に成功したとすれば、その最も重要な機能の一つは、永年の間に人々の心の内部に洗練された趣味と共に美の観念を啓発する事ではなければならない」という言葉を残しています。神戸女学院の学び舎が生徒・学生の心に育んだものは、「今すぐ」だけではなく、永年、すなわち生涯を通しての財産になる、神戸女学院で育んだものは生涯、心の内に宿る財産になる。わたしはこの言葉をそのように解釈しています。神戸女学院の教育の営みは、在学生の人生においても、学院の歴史においても「今」を大切にすることはもちろんですが、先を見通し、次代へと繋ぐものであると日々感じています。

この神戸女学院の礎がどのように築かれ、継承されてきたのかを考えると、わたしたちは総説と各論からなる『神戸女学院百年史』を参照しつつ、創立者である二人の女性宣教師の信念と行動を、また人々に支えられ発展してきた学院の道程を知ることになります。同書は百年間の学院の歴史を今に伝え、建学

の精神や苦難の歴史、その中でも屈することなく続いてきた歩みをとりとまとめています。

この『百年史』はそれ以前の学院史を振り返る刊行物の集大成でもありました<sup>①</sup>。

単行された初めての学院史は創立 25 周年の際に配布された『神戸女学院略史』で、その後、40 周年にめぐみ別冊『私立神戸女学院沿革史』、50 周年に『神戸女学院史』が刊行されました。75 周年を記念して 1950 年にデフォレスト先生がまとめた英文の“The History of Kobe College”は、1934 年の岡田山キャンパス落成式の際に先生が編集した『神戸女学院新築記念帖』（1984 年に神戸女学院記念帖委員会編『岡田山の五十年』に再録）とともに、2023 年の「C.B.デフォレスト展—愛と美を求めて—」（於、神戸女学院図書館本館）に出展しました。その後 1955 年に刊行された『神戸女学院八十年史』は、「あとがき」（和島芳男先生執筆）に「解釈なき史料の配列は単なる年代記であって歴史書ということはできない」と記されるように、歴史家のまなざしにより編まれたもので、続く『百年史』の基盤となる内容を備えています。またこれらの学院史とともに、『神戸女学院 千八百七十五年—千九百二十五年』（1925 年）、『神戸女学院 その歴史を描く 明治八年—昭和二十五年』（1950 年）、『神戸女学院・目で見ると見る百年 Kobe College 1875—1975』（1975 年）の三冊の写真集が編まれています。

なお岡田山の建築物に特化した形で 2013 年に出された神戸女学院岡田山学舎建築歴史調査委員会編『神戸女学院岡田山学舎の建築 歴史調査報告書』、同編『神戸女学院岡田山キャンパス—ヴォーリズ建築の魅力とメッセージ』は、年史とは異なる視点から岡田山キャンパスの歴史を紡ぎ出した刊行物です。

『百年史』刊行以降の学院史を知るためには史料室の機関誌である本『学院史料』が大いに参考となります。史料室は、1970 年から始まった『百年史』編纂等のための史料整備の仕事にかかわって、1972 年に設置されました。1989 年には「史料室規程」が定められ、以後、史料室専門委員会、史料室運営委員会が開催されてきました<sup>②</sup>。その後、組織再編により 2005 年度から史料室は図書館の一部として運営される形になっています。本誌はもともと年史編纂にかか

わって刊行されることになったもので、この先に編まれるであろう百五十年史、二百年史のためにと 1983 年 3 月創刊されました。なお時代の流れを受け、今号より『学院史料』はウェブジャーナルとして刊行することになりますが、新たな読者層の獲得に繋がるものと期待しています。

以上、150 周年を迎えるにあたり、『百年史』までの年史刊行をふりかえりました。これらを受け継ぐものとして飯 謙院長のもとで、『神戸女学院百五十年史』の編纂が進められていることは、その経緯とともに飯院長が本誌第 30 号、37 号巻頭言などにより広く案内されてきた通りです。先行して写真を中心にした一冊が、その後、『百年史』に続く学院の歴史を綴る書が刊行される予定です。また、2025 年 3 月に史料室ホームページが新たに開設、公開されたこともご報告いたします。

この 150 周年という節目の年に、神戸女学院に関する文書的諸史料の収集、整理、管理を主業務とする史料室は、図書館とともに学校法人神戸学院が所蔵する資料のデジタルアーカイブ化の実務も担うことになりました。資料は、過去の歴史的事実を、現在に、そして未来に伝えるものであり、専門的知見を備えた者の適切な整理を経て、社会に公開することが求められます。2015～18、21～24 年度の通算 8 年間にわたり図書館長として史料室の業務にかかわった立場から、神戸女学院の歴史を発信する拠点である史料室が、今後も学内外の多くの方々に有用な情報を提供し続け、その活動が一層広がりゆくことを心から願っています。

## 註

① 若山晴子「『神戸女学院史』の歴史」（『学院史料』第 18 号 2002 年 10 月）参照。

② 山内祥史「史料室を担当するに際して」（『学院史料』第 8 号 1990 年 3 月）参照。

（大学図書館（史料室）長）

# 神戸女学院のキリスト教育について

## —大学のキリスト教科目の変遷を中心に

飯 謙

### 0. はじめに

神戸女学院はキリスト教主義に基づく教育機関である。2025年4月に改訂した寄附行為「まえがき」では学院の「教育の根幹」を「キリストの教（と国際理解の精神）」、さらに第3条で「キリスト教信仰に基づく立学の精神」と述べ、その立場を明確にしている。大学も学則第1条で学院における教育の目的を「キリスト教の精神を教育の基本とし…キリスト教的女性を育成」、同様に中学部及び高等学部の学則もやはり第1条で「キリストの教えに基づいて人格を陶冶すること」と述べ、創立以来の祈りを反映させている。

ここで問われるべきは、学則に謳われる「キリスト教的女性」や「キリストの教えに基づいて」陶冶される「人格」の内容である。この「キリスト教的女性」（1999年4月の学則改正までは「キリスト教的婦人」）の理解について、筆者は神戸女学院奉職直後に直接ご指導を仰いでいた茂 洋先生から伺ったことがある。細部まで正確に記憶しているとはいえないが、「聖書やキリスト教に関わる一般的な教養をもち、他者に奉仕する精神を備えた女性」という意味の説明をいただいた。以来、質問を受けることがあれば（公的な文書に記したことはないが）そのように答えてきた。基本的にはこの言葉に神戸女学院のキリスト教教育の到達点が見られていると言えよう。今回、キリスト教教育についてまとめるよう依頼を受けた。筆者は長く学院チャプレンを務めさせてもらったが、日常的に担った現場は大学にあった。そこで本稿では、新制大学以降におけるキリスト教教育の変遷にフォーカスし、与えられた責務を果たしたい。

## 1. 礼拝—チャペルアワー、アッセンブリアワー、宗教強調週間

大学のキリスト教教育は、神戸女学院の歴史とキャンパスなどがもつ総体とは別に、基本的・具体的に礼拝（大学では1998年度からチャペルアワー）とキリスト教に関わる講義によってなされてきた。講義はもっぱら総論的な知識を与え、チャペルは各論として各自の来し方を考えるヒントを提供する。言うなれば、それらが両輪となってキリスト教教育が行われてきたといえよう。

チャペルの担当者は、大ざっぱな図式としていえば、1990年代前半までは主にチャプレンを中心とするキリスト者（教職員と学生）、1990年代後半以降は、キリスト者ではあられない教職員にもご参加いただくようになった。その移行に先立って、全教職員にアンケート形式で、礼拝の時間にご自身の関心事や人生観などをキリスト教それ自体や学院の立学の精神との関わりでお話しいただけるか伺い、大半の方から前向きな返事をいただいた。これを大学の宗教活動委員会で報告・討議の上、枠組みの拡幅を決定し、今日に至っている。キリスト教的な背景によらない話が続くことも起こりうるので、チャプレンの担当回との組み合わせにも配慮を要するといえる。

金曜日は1時間の設定で、講演会や演奏会が行われる（1997年度までの呼称は「礼拝」。それ以降は「アッセンブリアワー」）。少なくとも1960年代前半には現在のスタイルで行われていたと聞いている。筆者はしばしば、主に講演会や演奏会が行われる時間をなぜ「礼拝」と呼ぶのかとの質問を受けた。この性格について、筆者には教会で礼拝後に行われていた愛餐会のイメージが理解の助けとなった。すなわち、愛餐会では昼食を共にした後、教会の信徒が卓話として、自身の職場等で直面する問題を語り、それに続いて出席者がキリスト者としての在り方をめぐって意見を述べ合う。恐らく神戸女学院におけるアッセンブリアワーの時間帯も、当初はそのような意図があったのだろうと想像する。例えば科学の最新情報を聞き、新たに到来が予想される社会にあって隣人愛に生きる方途や必要性が意識されたのではなかったか。言うなれば、単なる講演会ではなく、神戸女学院がキリスト教の知識と精神を備えた女性を送り出す重要な場として機能していたのだと考える。このチャペルアワーとアッセンブリアワー



を組み合わせた形式は、後述する1990年代のカリキュラム検討委員会の中で議論されたこともあったが、教務部長を始め、大学関係者から神戸女学院の教育の根幹として維持すべきであるとの意見が出され、変更されることなく今日へと継承されている。

宗教強調週間は、チャペルのプログラムをさらに凝縮したかたちで展開されている。秋の一週間に外部から著名人を招いて、中高、大学、学生寮、PTA、めぐみ会が、同じ先生からお話しを伺い、キリスト教信仰への理解を深めるとの趣旨で行われる。月曜日に学院チャプレン、金曜日に宗教音楽を聴くという形式は今日に至るが、かつては火曜日から木曜日まで一人の講師に奨励をご担当いただいていた。しかしながら、1990年代頃から一人の先生に複数日程を割いていただくことが困難になり、現在は各日に個別の先生をお招きしている。これに朝8時からの早天祈禱会(中高部では授業期間中は毎日守っている)が加わり、神戸女学院の良質な伝統が形成されているといえよう。

## 2. 新制大学設置後の講義

では、講義はどのようなカリキュラムが組まれているのだろうか。学院の図書館が所蔵している『神戸女学院大学学修便覧』（以下「便覧」）によって確認した。便覧は1951年度版、すなわち新制大学設置第4年目が第1号であり、残念ながらそれ以前の3年間には、根拠となる文書資料は存在しないことになる。便覧によれば1951年度は「宗教Ⅰ～Ⅳ」（Ⅲは開講せず）という名称で一般教養の人文科学系科目として設置されており、第1年次配当の「宗教Ⅰ」は前後期各2単位、計4単位配当であった。公立学校出身者など初修の人とキリスト教学校出身者や教会に連なる人など既修の人とを分け、前者は前期に「イエスの生涯」、後期に「イエスの教訓」、後者は前期に「新約聖書解題」、後期に「福音書の研究」を扱う。「宗教Ⅱ」はパウロに関わる学修で、前期もしくは後期に2単位を履修する(学科によるクラス分け)。担当はⅠとⅡともに田中 貞教授と田中左右吉教授。「宗教Ⅳ」は後期のみ開講。畠中 博学長の担当で「キリスト教の要義」（2単位）。ここから新制大学では在学中の3年間に8単位の必修であった

ことが分かる。1952年度も同内容だが、田中 貞教授が名古屋学院院長就任で転出されたことから、Iは畠中学長、二宮源平講師、田中左右吉教授、IIは溝口靖夫教授と田中教授、IVは畠中学長が担当している。

1953年度からは一般教養の社会科学系に配置され、1校時を50分とし、学期あたりの単位数は1単位とした。これによって1953年入学生からは、第1年次から第4年次まで常時、科目としてのキリスト教を学ぶことになる。名称も「基督教学Ⅰ～Ⅳ」と改められた。この4科目が初めて揃ったのは1955年度のことで、この年にはそれまで「開講せず」としていた「基督教学Ⅲ」が開講された。講義内容は、社会学科、家政学科学生のためにはキリスト教史、音楽学部生には詩編や讃美歌史、英文学科生には Dr. D.C.Stubbsが Bible as Literature、4年次生には田中教授が「聖書神学」を講じた。この年度からは、「一般教育科目」とは別の「宗教科目」として、特別な扱いとなったことも特記されるべきであろう。第1年次から第4年次まで常時必修、計8単位となるスタイルは1956年度に完成した。1957年度には山田基男教授が着任。各年次に割り当てられた科目が定着し、本学のキリスト教のカリキュラムは、言わば水平飛行に入っていく。

ここでキリスト教学(神学)の枠組みに触れておきたい。キリスト教学とは何か。定義づけは容易ではないが、キリスト教がどのような世界観、人間観、価値観を語っているか考察する分野であり、「キリスト教信仰の構造を解明すること」を目的とすると言ってよいだろう。「信仰の構造を解明する」ため、神学では伝統的に聖書学(旧約、新約)、キリスト教史、組織神学(実践神学を含む)を設置してきた。聖書学は、古代ユダヤの宗教がそもそも何を目指していたかといった原点を探求し、キリスト教史はその変遷をたどる。それぞれは過去の出発点や変化を視野に納める。対して組織神学はそれらのデータを体系化し、(学修者が生きる)「現代」におけるキリスト教理解を示す。その意味で、神戸女学院大学で新制大学成立から約10年ほどをかけて1950年代後半までに定着したキリスト教の講義科目群は、神学の基本的な枠組みをカバーしており、「聖書やキリスト教に関わる一般的な教養」を習得するにふさわしいカリキュラムであったといえる。

### 3. 大綱化と1995年のカリキュラム改訂

前項で述べたカリキュラムは、細部についてはともかく、1990年代半ばまで40年以上にわたり、大きな変更なく継承された。変化について述べるならば、担当者や内容がより専門化していった点であろう。特に1962年に茂先生が着任されてから、専任者や非常勤講師の選任にその傾向がますます強まった感がある。こうして、神戸女学院生は、第1年次で入門講義、第2年次にパウロを中心とする新約学、第3年次でイエスやパウロの思想的背景となる旧約学、それらの基礎学修を第4年次で組織神学・キリスト教思想を履修して応用の方途を考え、キリスト教の全体像を把握するよう願われた。礼拝への出席も義務づけられていて、総論と各論の両輪からなるキリスト教教育が順調に進行したかに思える。その一方で、礼拝の時間前後に講義のない（キャンパスにいる必要のない）学生からの不満も届けられ、1960年代末にカード形式による礼拝の出欠確認は廃止されて、自由出席となった。1970年代には基督教学Ⅰに「礼拝レポート」を導入して学期に一定回数出席を課し、礼拝を日常に組み込む努力がなされたという。こういう時期に「学内のキリスト教主義は形骸化している」といったOGからの辛辣な批判も散見されるが（『朝日ジャーナル』1980.7.11号, p.46）、現場の教職員が状況打開に向けて重ねた努力も評価したく思う。

なお、「基督教学Ⅰ」で初修者と既修者をクラス分けする体制は、1970年度に本学院高等学部出身者と他校出身者とに分割する方式に変更されたが、その記載は1971年度を最後に便覧からはなくなる。高校までに「聖書」関連の授業を受講しているとしても、大学の「基督教学」は別の学術的なスタンスにあるとの認識に立ったゆえと想像する。他方、学術的な関心を高めるためであろう、1971年度には一般教養の人文系に「宗教学」、1973年度には「近代基督教思想」を新設した。また1976年度には総合文化学科設立に伴い、人間研究系の専門科目に基督教思想史、現代基督教思想、宗教史特講、聖書学などを設置し、入門講義以上の関心に対する受け皿とした。学問の府におけるキリスト教を学術的にどのように提供するか、議論の結果であったと考える。

1991年の文部省による大学設置基準大綱化により、各種規制の弾力化がその

象徴として取り上げられ、神戸女学院大学でもそれに沿ったカリキュラム改革が課題となった。大学のカリキュラム検討委員会は、①講義の総枠数増加のため、従来の1校時50分を90分に改め、1日に（50分の授業を2校時連続させて1枠として扱って）4枠であった授業時間設定を5枠化、②先修科目や難易度の明示、③前項との関連で科目の名称と内容の連動、④講義内容を日常に引き寄せる努力、⑤可能な限り学生による選択肢の拡張などの方針を立てた。

大学チャプレン会は数次にわたる討議を経て、それまで漢字の「基督教学」としていた名称の表記をカタカナの「キリスト教学」と変更し、1994年度から全科目に適用した（漢字表記では学生が読めず、内容が掴めない）。そして新カリキュラムとして、これまで第1年次に「基督教学Ⅰ」として前後期各1単位、計2単位で行っていた入門講義を、1枠90分、前後期各2単位、計4単位の「キリスト教概説」とし、必ずまとまったかたちでイエスの思想を組み込むことを申し合わせた。さらに従前は第2年次から第4年次まで間断なく前後期各1単位で設置されていた諸科目を、前期もしくは後期のみ2単位の「キリスト教学」（旧約学、新約学、キリスト教史、キリスト教思想の4科目）として再編した。キリスト教史には欧米のそれとともに日本のキリスト教史も設置した。学生は自身の関心にしたがって第2年次以降に2科目4単位以上を選択・履修することとした。もちろん、4科目すべてを卒業単位として履修することもできる。このカリキュラムは1校時を90分に変更した1995年度の新入生から適用した。概説と合わせて合計8単位以上となり、新制大学設立以来の単位数は継承された。この改訂によって、キリスト教学の入門講義と中級、総合文化学科に設置された専門科目の区別が明示され、学術的な環境が整えられたといえる。また「日常に引き寄せる」試みとして、キリスト教科目とは別に、チャプレン室のコーディネートということで、自校史科目（初期神戸女学院）を構想した。余談だが、これらのカリキュラム発進直前の1995年1月17日午前5時46分、阪神・淡路大震災が起こった。少なからぬ人が、この新たな小さな企図が神戸女学院の、ひいては地域全体の復興の象徴となるよう願ったものであった。

#### 4. むすびに代えて

以上、述べてきたように、神戸女学院大学のキリスト教科目は8単位以上とされてきた。いわゆる少子化に伴って大学で次世代の教育の在り方やカリキュラム等を議論する「2018年問題検討委員会」(2014年度設置)が提案したクローバーゼミ必修化(4単位)に伴い、2017年度入学生よりキリスト教科目から2単位をクローバーゼミに分かつこととして、キリスト教科目の卒業要件は6単位以上となった。新設のクローバーゼミが広い視点から「神戸女学院学」に関わると判断したからである。それにより、これまで上級生向けの「キリスト教学」から4単位以上履修すべきとしていたところ、2単位以上とした。必修から外された2単位は、2016年度から聖書原典文法と講読(旧約は古典ヘブライ語、新約はコイネー・ギリシア語)として、新規に1学期2単位の選択科目とされた。これは入門的な基礎科目であるが、旧新約聖書の思考回路を理解する上で有用と考えられた。ヘブライ語とギリシア語は2018年度から総合文化学科における宗教学分野の専門科目となり、一般の大学に見られない、神戸女学院大学の学術面での特徴を形成することが期待された。

本稿は、神戸女学院のキリスト教教育の目指す姿が、「聖書やキリスト教に関わる一般的な教養をもち、他者に奉仕する精神を備えた女性」を送り出す点にあるとの理解から、主にキリスト教科目の変遷を叙述してきた。ここに掲げた茂先生のお言葉を筆者なりにかみ砕くと、前半が狭義の理解にあたり、主にチャプレン職にある者が取り組む課題、後半は広義のそれにあたり、全学院を挙げての課題と性格づけられようか。

大学のウェブサイトの「長期目標・計画(2021-2030年度)」に書かれた目指す学生像には「21世紀にふさわしい教養と知性、高い語学力、そして『愛神愛隣』の精神を身につけ、どのような立場に置かれても十分に能力を発揮し、状況に立ち向かうことができる学生」との記載がある。同じく中高部のウェブサイト「教育方針」も送り出したい生徒像を「…一人一人が自主性をもって、自らの果たすべき責任を十分に果たす人間になるという意味での『自由』を大切にし…他者のために自分が何をなすべきかを考え、自らの良心に従って、その役割

や責任を果たそうとする」と述べている。どちらも茂先生が語られた思い、そして神戸女学院が長きにわたって取り組んできた願いが反映されていると感じる。この課題自体は、数値的な完成が期待される領域の事柄（受洗者の人数を考える人もいるかもしれないが）ではない。「『愛神愛隣』の精神を身につけ」、その実現ために与えられた「能力を十分に発揮し」、「他者のために自分が何をすべきかを考え…その役割や責任を果たす」人の輩出は、立学以来の祈りと言えよう。本年創立150周年を迎えるにあたり、改めてその祈りを心に刻み、日々、教育の業に勤しみたい。

（院長）

# 神戸女学院岡田山キャンパスの自然史

野寄 玲児

## 岡田山の自然環境

神戸女学院は1875年にアメリカのキリスト教宣教師 E. Talcott と J. Dudley によって神戸市山本通に設立され、C. B. Deforest が院長を務めていた1933年にこの西宮市岡田山に移転してきた（神戸女学院百年史編集委員会編 1976）。岡田山は兵庫県西宮市の南部、西宮市街と六甲山とのおおよそ中間に位置している。岡田山には「山」という名が付いているが、地形的には中期更新世の海成堆積層（大阪層群）が陸上に現れた洪積台地にあたり、北側に隣接する上ヶ原地区とともに六甲山地の南東麓を縁取る上ヶ原台地に属しその南東端を占めている。正門下の沖積低地面から学院の主力建物群が並ぶ台地平坦面までは約40mの比高があり、下から見上げると山のように見えるのでこのような地名が付けられたと思われる。地形は、西・南・東の三方が開けた半島状を呈しており、西側と東側には急斜面が卓越し、南側は小さな谷を伴う開析の進んだ斜面からなっている。北側は、隣接する関西学院聖和キャンパスを経てさらに通称上ヶ原とよばれる甲山の麓までは、徐々に高さは増すがほぼ平坦な土地が広がっている。地質は台地の表層を薄く被う上ヶ原礫層とその基盤をなす大阪層群からなり、下部には粘土層や砂礫層が、上部には砂礫に花崗岩等の円礫が混ざる地層が堆積している（藤田ほか 1959）。気候は温和で、神戸女学院高等学部における1964～1971年間の観測値（岡田山の自然編集委員会編 1974）によると年平均気温15.4℃、年降水量1296mmで、温度的には暖温帯域の下部、気候区分では盛夏や冬に雨の少ない瀬戸内式気候に属している。

神戸女学院が移転してくる前の岡田山の南半部には、旧尼崎藩主であった櫻

井家の別邸があり、その北側に続く果樹園等を含む約 11 ha の土地を購入して学院用地とした（神戸女学院百年史編集委員会編 1976）。大学の中庭にある大きなセンダンとイロハモミジは屋敷の庭木をそのまま残したものである（岡田山の自然編集委員会編 1974）。その後、各所の隣接地を購入した結果、現在のキャンパスは約 14.6 ha の広さとなっている。移転時のキャンパスプランを担当した W. M. Vories は、台地上の平坦面に大学、中学・高等学部の校舎、学生寮、グラウンドなどを、尾根に挟まれた谷間に音楽館を配するなど自然の地形をそのまま利用した計画を立てた。岡田山の前に計画されていた明石市の大蔵谷校地は地形・地質が岡田山とほぼ同じであるが、斜面の一部を掘削・盛土して平坦面を創出するという工法が予定されていた（神戸女学院百年史編集委員会編 1976）。岡田山でこの工法が採用されなかったのは、台地の上面に十分な平坦面が確保できていたこと、岡田山移転の 10 年前に起きた関東大震災で軟弱地盤の怖さを学んでいたことがあげられる。Vories のキャンパスプランのおかげで台地の周囲の斜面には山林が残されることになり、これが今日の緑豊かなキャンパスの姿につながっている。移転当時は、眼下の平野面や北に続く台地平坦面には水田が広がるとともに、岡田山もマツの疎林や果樹園など総じて里山的な田園風景のなかにあった（岡田山の自然編集委員会編 1974）。岡田山の周辺では移転当時すでに阪急電鉄神戸線や今津線が開通していたので、駅や街道沿いを中心に次第に宅地化が進みつつあったが、このような状況は第二次世界大戦後あたりまで続いたようである。1960 年代の高度経済成長期あたりから周辺の都市化が急速に進み、岡田山を除く上ヶ原台地の平坦面でも農地が消えて宅地へと変わっていった。周辺地域の都市化は 1995 年の阪神淡路大震災を契機にさらに進み、震災からの復興がなされた西暦 2000 年頃には現在の街の姿がほぼ完成した。すなわち、現在の地域一帯には住宅やマンションなどが建ち並んでいるが、岡田山をはじめとする一部台地の急傾斜地には森林が、沖積低地の一部には農地（生産緑地）がわずかながらも残された。とりわけ広大な森が残る岡田山は西宮市南部における貴重な自然緑地となっているが（野寄 2013）、每晚数百羽のカラスが集まる時（ねぐら）ともなっており、騒音や糞害によって少なからず学院を悩ま



せている。岡田山がカラスの埒となったと考えられるのが 2000 年頃（野嵜ほか 2014）、すなわち周辺の街の姿が完成した頃とほぼ一致しているのは、野生動物と人との関係性を考える上で大変興味深い事実である。

### 岡田山キャンパスの植生

岡田山キャンパスの総面積（14.6 ha）の 35% に相当する約 5 ha が、ブナ科やクスノキ科、ニレ科、ユズリハ科などの樹木からなる天然林に被われている。この天然林と主として植栽樹群地からなる庭園緑地約 2 ha とを合わせると、岡田山キャンパスのほぼ半分が緑地で被われていることになり、市街地に浮かぶ緑の島として地域の自然環境保全や景観形成に大きな役割を果たしている（野嵜 2013）。この天然林の大部分にあたる 4.54 ha が西宮市の景観樹林保護地区に指定されており（保護地区 No. 26 神戸女学院岡田山林）、その広さは市の景観樹林保護地区（全 26 地区）全体の約 3 割に相当する。しかし、この保護制度は樹林の維持のために必要な行政的、経済的補助を伴っていないので、実質的な街の緑の維持にはほとんど機能していない。

岡田山キャンパスの斜面に広がる天然林は、かつて果樹園や農用林として利用されていた疎林や雑木林、ところにより草原や禿げ山のような状態から遷移が始まったと考えられる。神戸女学院が岡田山に移転して 16 年目にあたる 1949 年当時の写真をみると（岡田山の自然編集委員会編 1974）、岡田山の斜面の大部分はマツの雑木林に被われていた。そして、西山にはススキ草原が広がり、その中にマツの高木が散在するパークランド的な景観が広がっていた。移転後約 30 年が経過した 1966 年頃の写真を見ると、マツが成長して校舎と同じくらいの高さになるとともに広葉樹が増えている様子がうかがえる。西山は相変わらずススキ草原のままであるが、これはいく度かの山火事による退行遷移の結果と考えられる。かつては、このような草原の各所に小規模な湧水湿地がみられたが（岡田山の自然編集委員会編 1974）、その後、草原や湿地のほとんどは森に覆われて消滅し、現在では音楽館の周辺に断片的なものが残るに過ぎない。音楽学部 1 号館の東側山裾に残る小湿地は、ヌマガヤ、マメスゲ、ノグサなどが

優占する貧栄養湿地であり、コモウセンゴケやカキラン、ミズスギといった兵庫県では絶滅危惧種に指定されている希少植物（兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課編 2020）を多く含む貴重な植生である。

現在の岡田山は森林の遷移が進んで、コナラ、アベマキなどの夏緑広葉樹が主体の二次林（いわゆる里山の雑木林）から、それらにクスノキ、アラカシ、ヒメユズリハなどの常緑広葉樹が混ざり、一部区域ではそれらが優占した相観を呈している。とくに、東側斜面の一角を占める谷門の森（図1参照）には岡田山で最も発達した森林がみられ、ヒメユズリハやクスノキ、アラカシ、モチノキ、クロガネモチなどの常緑広葉樹が優占して鬱蒼とした照葉樹林を形成している。

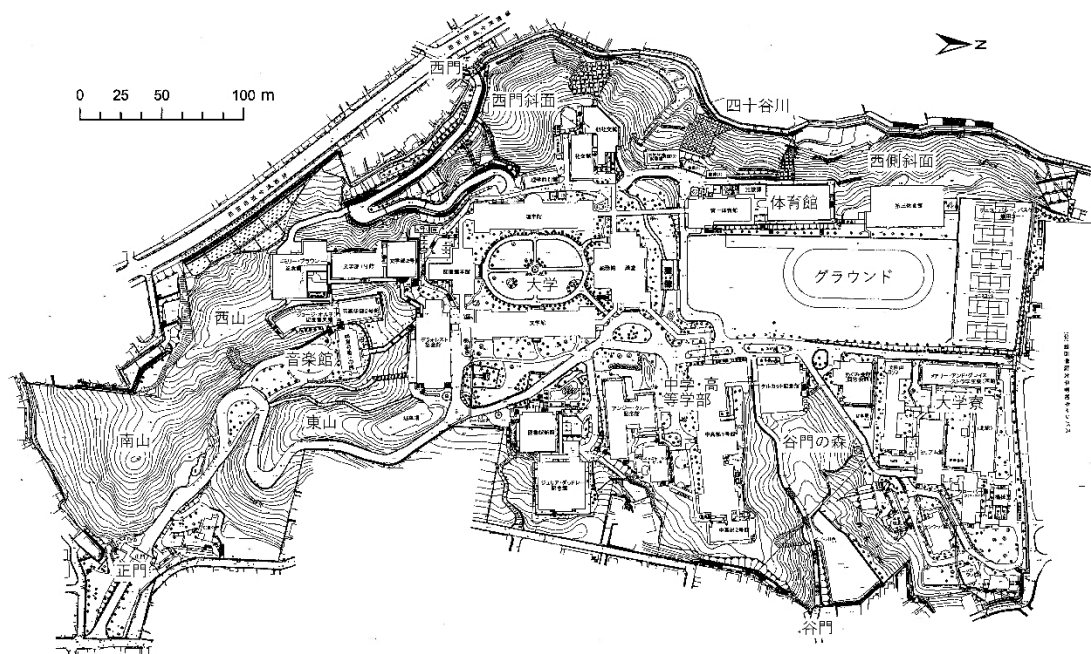


図1. 神戸女学院岡田山キャンパス

この森には、センリョウやアリドオシ、コ克蘭などの暖温帯照葉樹林を生育地とする植物が特徴的にみられ、「岡田山のヒメユズリハ群落」（要注目群落）として県のレッドデータブックに掲載されている（兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課編 2020）。遷移の原動力となっているのは、岡田山の緑に惹き寄せられてくる各種野鳥が、他所で食べた木の実の種子を糞やペリットとして排泄する、いわゆる被食散布の働きが大きい。例えば、クロキやクマノミズキなどはこの

辺りでは甲山にしか見られない樹木であるが、稀にキャンパス内で実生が芽生えて成長しているのが観察される。すなわち、岡田山の森は野鳥によって育まれた森と言っても過言ではない。一方、雑木林時代の名残であるコナラの大木（胸高直径 50~65 cm）は、2015 年頃に始まったナラ枯れ（カシノナガキクイムシによる食害と菌害）によりそのほとんどが枯死し、常緑広葉樹林への遷移が進む要因の一つとなった。岡田山の西側は、西隣を流れる四十谷川によって開析された急斜面が卓越しているが、地層の各所から湧水の浸出がみられ、ハチクを伴うエノキ・ムクノキなどの半湿生林が成立している。以前はこの中に、ハンノキやサクラバハンノキ（環境省の準絶滅危惧種）が点在していたが、遷移が進んで今では各 1 本を残すのみとなっている。

台地の平坦面はグラウンドや建物群を除くと、主に植栽樹群地や芝草地からなる庭園となっている。植栽樹群地はソメイヨシノやクスノキ、クロマツ、アラカシ、イロハモミジ、イヌマキ、ツバキなどの多様な樹木が植えられ、定期的に剪定、除草が行われている。庭園と通路の境目はウバメガシやカイヅカイブキ、サザンカなどの生垣で縁取られている。庭園の林床には蘚類がマット状の群落を形成しており、その中にヒメウズやツボクサ、コナスビ、ヒメヤブラン、ノゲヌカスゲなどの半陰生の在来草本が豊富にみられる。一方、グラウンドや大学中庭などの向陽の草地では主にシバが優占し、チチコグサやカンサイタンポポ、スマレ、スズメノヤリ、チガヤなどの陽生の在来草本が多くみられるが、シロツメクサやコメツブツメクサ、セイヨウタンポポ、ウラジロチチコグサ、シマスズメノヒエなどの帰化植物も多い。大学中庭は櫻井家の屋敷跡にあたるが、在来のカンサイタンポポの群生地として都市の中では貴重な生態系が保たれている。グラウンドなどの踏圧の高いところでは、夏から秋を中心にオヒシバやアキメヒシバ、ネズミノオなどのイネ科雑草が繁茂する。本学のグラウンドはシバを中心に数十種類の野草が生育する半自然草原であり、草原棲の昆虫の棲息地や野鳥の餌場として、また、大都市圏の中で 100 年近く存続している草地生態系としても重要なものである。

## 岡田山の生物相

岡田山の生物相については、1967年に『岡田山植物目録』（神戸女学院高等学部理科学研究部編 1967）がまとめられ、植栽種を含む約400種の植物が記録されている。そして、学院創立100周年記念誌の『岡田山の自然』（岡田山の自然編集委員会編 1974）には、植栽種を含む植物約560種および昆虫140種、鳥類43種が記録されている。さらに、その増補改訂版（神戸女学院環境保全委員会編 1982）には、植物約40種、昆虫9種、鳥類8種が追録され、新たに淡水藻類および菌類の記録が増補されている。これらはおよそ半世紀前の岡田山の生物相を示す貴重な記録であるが、植物では植栽種と一緒にまとめられている上に誤同定と思われる種もあり、昆虫や野鳥を含め多くの未記録種の存在も予想された。2000年代に入って、筆者ら（人間科学部環境・バイオサイエンス学科、植物生態学研究室）が証拠標本に基づく岡田山の自生高等植物（維管束植物）相を報告（野寄ほか 2006a, b, 2007, 2009）したのを皮切りに、その後、植物と脊椎動物（野寄 2010）、鳥類（野寄ほか 2014）、一部の昆虫（遠藤 2020）、脊椎動物（野寄ほか 2021）などが報告され、岡田山の生物相の全容が次第に明らかになってきた。

ところで、岡田山キャンパスの生物相に関する最古の記録である可能性がある資料が図書館に残されている。それは岡田山移転時の院長である C. B. Deforest によるクモの細密画である。全54葉に及ぶこの細密画は約50種のクモを12 cm x 9.5 cm の画用紙に鉛筆と水彩絵具で描いたきわめて精緻なものであり、分類上重要な眼の位置なども正確に描かれている。絵は基本的に原寸大で描かれているが小さなものは拡大してスケールが示され、裏に学名や科名が記されたものもある。しかし残念なことに、この画には描かれた年やクモの採集場所などの記載が全くない。彼女の生涯に詳しい竹中（2003）は、軽井沢や比叡山などの滞在先で描かれたものと推測しているが、根拠は記されていない。描かれている種類は、コガネグモやジョロウグモ、ゴミグモ、クサグモ、アリグモなどの庭園や里山棲のクモ、アシダカグモやヒラタグモ、ユタカヤマシログモ、オニグモ類など家屋とその周囲に棲むクモなど、現在の岡田山にもみられる種が多いことから、旅先で時間と手間暇をかけて描くようなものとは思え

ない。Deforest は女学院で各種の生物標本を集めていたようなので(竹中 2003)、もしかするとその頃に描かれたものかもしれない。図書館には、彼女が寄贈した北米産クモ類のモノグラフ (Emerton, 1902; Comstock, 1903) が 2 点収蔵されており、上記の細密画のうちの 1 葉は Emerton (1902) のクモの体の構造図を模写したものである。

岡田山のシダ植物以上の自生高等植物の種数は、2010 年当時の現存種を報告した野寄 (2010) によると約 600 種であるが、秋の七草のキキョウやオミナエシ、食虫植物のモウセンゴケやイシモチソウなど既に岡田山から姿を消した植物を含めて数えると、2000 年代後半の時点で 681 種であった (野寄ほか 2006a, 2009)。岡田山から姿を消した植物の絶滅理由は、おもに森林の発達に伴う草原や湿地環境の消滅によるものであり (野寄 2010)、その傾向は今も続いている。一方、帰化植物(外来種)は年々、種数・生育量ともに増え続けており、野寄(2010)以降に確認された帰化植物だけでも 20 種を超えている (矢野 2021)。したがって、過去および現在までに岡田山で記録のある高等植物の総種数は 700 種を超える。

高等植物以外では、蘚苔植物についても断続的に調べられており、『岡田山の自然』には、蘚類 21 種、苔類 5 種の計 26 種の蘚苔類が報告されている (岡田山の自然編集委員会編 1974)。卒業研究で岡田山の蘚苔植物相を調べた植物生態学研究室の西原 (1999) は、蘚綱 56 種、苔綱 10 種、ツノゴケ綱 1 種の計 30 科 67 種、上杉 (2021) は絶滅種 2 種を含む蘚綱 23 科 67 種、苔綱 12 科 28 種、ツノゴケ綱 1 科 1 種の計 36 科 93 種を報告している。蘚苔植物にはなお検討が必要な種や未記録の種があることが予想されるので、岡田山には 100 種程度の蘚苔植物が生育しているものと推測される。キャンパス内の庭園で目立つのは、コバノチョウチンゴケ、コツボゴケ、タチゴケ、エゾスナゴケ、ハイゴケなどの蘚類、およびジャゴケ、ジンガサゴケ、ツクシウロコゴケなどの苔類である。比較的明るい山林や庭園には、以前はホソバオキナゴケやヤマトフデゴケの小群落が見られたが、森林の発達によって最近はめっきり少なくなった。なお、50 年ほど前には南山 (正門を入れてすぐ左手の山) にオオミズゴケの小群落

があり、ミズゴケ湿地に特有の昆虫ヒメタイコウチが棲息していたことが報告されているが（大川・上田 1987）、ここも遷移が進んで森林化したことで、いずれも今から 30 年前頃には姿を消したようである。

淡水棲の藻類については、本学中高部理科担当教諭の瀬戸良三が校舎脇の水生植物培養池およびプール（いずれも当時）から、シアノバクテリアや珪藻、緑藻など計 22 種を報告している（瀬戸 1980）。なお、シアノバクテリアは原核生物の真正細菌界に、他の藻類は真核生物のうちの広義の植物界に所属する光合成生物である。瀬戸はさらに『岡田山の自然』の改訂版において、万葉池や音楽館付近の湧水地等での調査結果を加えて、シアノバクテリア 4 科 4 種、および、紅藻および黄緑色藻、ミドリムシ藻各 1 種、緑藻 18 種、珪藻 34 種を含む藻類 25 科 55 種を報告している（瀬戸 1982）。なお、瀬戸（1980, 1982）では調査対象外であるが、学内各所の芝生にはシアノバクテリアの一種であるイシクラゲの群体がみられ、岡田山の西側を流れる四十谷川には環境省および兵庫県の準絶滅危惧種である紅藻タンスイベニマダラの生育がみられる。

菌類相については、本学中高部理科担当教諭の大川徹が 36 科 105 種のキノコ類を『岡田山の自然』の改訂版に報告したのが最初の記録である（大川 1982）。その後も、筆者をはじめとする人間科学部の植物生態学研究室で断続的に調べているが、いまだその全容を明らかにできていない。キノコ類 Fungi とは、菌類（菌界）の中で比較的大型の子実体（いわゆるキノコ）を形成する担子菌類と、子嚢菌類の一部を含む生物群である。卒業研究で岡田山のキノコ相を調べた植村・奥田（2008）は 27 科 103 種、中島（2021）は 2020 年度の調査記録に筆者による 2008 年度以降の視認記録（写真記録を含む）を加えて 62 科 213 種のキノコ類を報告している。その後の筆者による視認および採集記録を加えると、岡田山には 300 種を超えるキノコ類が棲息しているものと推定される。なお、年代の異なる調査間ではキノコの種類相に大きな違いが認められ、上記の全調査で共通して認められたキノコは 30 種程度に過ぎない。これは、菌類相（主として菌根菌類）が森林の遷移とともに大きく変わっていくことによるものと考えられる。2000 年頃までは里山の食用キノコであるヤマドリタケモドキやハツタケが

多く発生したが、最近はめっきり少なくなった。

子嚢菌類と単細胞性の緑藻またはシアノバクテリアとの共生体である地衣類 Lichen は、学内各所の樹木の幹や石垣、建物の外壁、地上などに様々な種類のものが見られる。しかし、岡田山の地衣類については、『岡田山の自然』（岡田山の自然編集委員会編 1974）にトゲシバリなど 3 種が記録され、その再版にウメノキゴケが追録されているのみで、ほとんど未解明である。筆者の研究室では数年前から調査を始め、目下卒論生（B21 東瀬戸梨佳）が分類学的研究を進めているところであるが、これまでに 50 種程度の地衣類を確認している。

よく発達した森がある岡田山では、梅雨時にしばしば変形菌類が観察される。変形菌は以前は菌類の仲間（菌界）とされていたが、最近は原生生物界のアメーバに近い生物（アメーバ動物門変形菌綱）と考えられている。筆者は岡田山でこれまでにツノホコリやマメホコリ、モジホコリ類、ムラサキホコリなど 10 種あまりの変形菌の棲息を確認している。

動物界のうち、脊椎動物に関しては野嵜ほか（2014, 2021）に詳しいので詳細は控えるが、岡田山で過去及び現在までに確認された野鳥の種数は現時点で 100 種を超えており、一年あたりでも四季を通して 50 種程度の野鳥を観察することができる。これらの数は、大学キャンパスでみられる野鳥の種数としてはかなり多く、都市の中の孤立林である岡田山がカラスを含め各種の野鳥に魅力的な棲息環境を提供していることを示している（野嵜ほか 2014）。哺乳類に関しては、ホンドタヌキやアライグマ、アブラコウモリなど 8 種ほどの棲息が確認されている。2010 年代に入ってニホンアナグマやニホンテン、ハクビシンなどがみられるようになったが（野嵜ほか 2021）、これはこれらの野生動物が都市部に進出し始めた全国的な傾向と概ね一致している。

昆虫については『岡田山の自然』（岡田山の自然編集委員会編 1974）に、後に神戸大学教授を務めた武田義明の調査による 63 科 140 種の昆虫が記録されている。しかし、この記録は単年度の夏期の調査に基づく限定的なものである。人間科学部環境・バイオサイエンス学科教授の遠藤知二（現、名誉教授）は、1996 年～2019 年間の標本記録に基づく岡田山の昆虫相の第一報として、チョウ目

33 科 279 種、トンボ目 7 科 23 種の計 40 科 302 種を報告し、さらに数的手法を用いてそれらの分類群の推定種数を示している（遠藤 2020）。それによるとチョウ類については概ね把握できているものの、ガ類については最大 200 種程度の未記録種があるとしている。トンボ目については 29 種程度と推定しているが、筆者による視認記録を加えるとすでに 30 種を超えている。これら以外の目については遠藤による報告を待つほかないが、チョウ目の種数は全昆虫の 2 割弱を占めるようなので (<https://www.ujssb.org/biospnum/search.php>)、上記の種数から計算すると岡田山キャンパスには 2000 種前後の昆虫が棲息しているものと推測される。

昆虫以外の節足動物に関しては、クモ類はジョロウグモやオニグモ類、キシノウエトタテグモ、ササグモ、コモリグモ類、ハエトリグモ類など数十種ほどがみられるが、全容は未解明である。各種ダニ類も未解明であるが、SFTS ウイルスを媒介する恐れのあるタカサゴキララマダニが 20 年ほど前からしばしば見つかっている。多足類ではオオゲジやトビズムカデ、アオズムカデ、数種のヤスデ類がみられる。甲殻類ではオカダンゴムシ、ワラジムシのほかに、構内および周囲の水系（四十谷川を含む）にはサワガニ、モクズガニ、スジエビ、ミズムシ等が棲息している。トビムシ、ダニ類、カニムシなどの小型土壌節足動物に関しては、2021 年度に環境・バイオサイエンス学科教授に着任した高橋大輔の研究室で調査が進められている。

節足動物以外の無脊椎動物に関してもあまり調査が進んでいないが、筆者はここ数年環形動物のミミズを調べている。これまでに 7 種のミミズが確認され、その多くはノラクラミミズやヨコハラトガリミミズなど、庭園や森林などに棲むフトミミズ科のミミズであった。特殊なものとしては、万葉池には水棲のヤマトヒモミミズ（ヒモミミズ科）が棲息している。扁形動物では、2000 年代に入って中国南部産のオオミスジコウガイビルが目立つようになり、数年前からは東南アジア原産のワタリコウガイビルも見られるようになった。水域で見られるプラナリアも北アメリカ産のアメリカナミウズムシがほとんどである。軟体動物も調査が不十分であるが、在来のカタツムリ類では、ここ 20 年ほどの間



にクチベニマイマイが見られなくなり、現在はナミマイマイのみが見られる。他の陸産巻き貝としてはニッポンマイマイ、ヒラベッコウ、ナミギセルなどが棲息するが、数は少ない。一方、国内外来種の可能性があるアズキガイが谷門の森などで急速に数を増やしている。ナメクジ類では、庭園などでは在来のナメクジがここ十数年の間にほとんど見られなくなり、南ヨーロッパ原産のチャコウラナメクジに置き換わった。森林棲のヤマナメクジも少し減ったように思える。岡田山キャンパスでは、上記のような分類群で深刻な外来種問題が起きている可能性があり、今後のモニタリングが必要である。

以上のような各種生物の総種数を累計すると、岡田山キャンパスの野生生物の種数はおよそ 3500 種前後（3000 種～4000 種）と推定される。

### 岡田山キャンパスの自然保護

上記のような岡田山の自然も幾度かの危機を経験している。最大の危機の一つは第二次世界大戦とおもわれるが、『神戸女学院百年史』（神戸女学院百年史編集委員会編 1976）をみても、戦争末期に谷門の森の一部に防空壕が掘られたという記述があるのみで、岡田山の自然環境に対する戦火の影響についての記述はみられない。燃料不足に伴う樹木伐採や焼夷弾等による山林火災は考えられるが、昔の岡田山が禿山に近い状態であったことを考えると、戦禍は生態系に大きな影響を及ぼさなかったと考えられる。その後の高度経済成長期におけるキャンパスの自然保護に対する実質的な取り組みは、『岡田山の自然』の編纂に関わった教職員有志が組織した「神戸女学院環境保全委員会」（初代会長は家政学部教授の矢野悟道）が担ってきた。環境保全委員会は 1970 年代初頭に組織され、本学の教育・自然環境の保全、景観保全、森林保全、庭木の保護・保全等について、約 40 年にわたり活動してきた。委員会が組織されたのは、その頃のエアコンの普及により構内各所に室外機が目立ち始め、景観の劣化を憂いた教職員が対策を話し合ったのがきっかけであったという（設立初期の委員で後に委員長を務めた元中高部教諭大川徹からの聞き取りによる）。

1993 年、岡田山の西側を削る形で西宮市道今津西線が着工され、現在、西山

と呼んでいる斜面の大半（約 3300 m<sup>2</sup>）が道路と法面に変わった。岡田山キャンパスの開設以来、本学の土地や自然がこれほどの規模で削られ、失われたことはなかった。西山は約 60 年前までススキ草原が広がっていた関係で、岡田山では最も若い森が成立しており、シラヤマギクやオケラ（兵庫県の絶滅危惧植物）など里山の雑木林に特有の植物が生育していたが、何れも道路工事によって姿を消した。そして、この年にいわゆる「西側崖地問題」が起きた。

1950 年頃、西山と南山の接続部付近の隣地所有者が、本学の同意なしに敷地境界の尾根部まで土地を掘削した結果、本学の土地（西山）が崖に接するような状態になっていた。その後 1990 年頃に隣地は別の業者を経て西宮市に買収されたが、宅地として開発するには崖の状態を解消する必要がある。市が崖下の土地を取得したのは、今津西線の着工による立ち退き家屋の代替え地の確保（またはその費用補填のための宅地分譲）が目的であった。土砂災害の発生を恐れた兵庫県は、崖の両側の土地所有者である西宮市と本学に防災措置を促してきた。災害が起きても本学に法的責任がないことは後に明らかになったが、解決を急いだ理事会が西宮市との間で、市所有地の宅地化と本学敷地内での防災工事を認める代わりに、工事を全額市の負担で行うという約束（包括的同意）を 1993 年 11 月に交わしていた。

崖は 90 度近い傾斜があったが、崖下の土地を宅地化するには山を削って傾斜 30 度の法面を設ける必要があり、これにより女学院側の山林約 2850 m<sup>2</sup> が新たに失われるというものであった。工事が実施されると、オルチン記念音楽館の南側に続く尾根が、長さ約 80 m にわたり最大 7 m ほど掘り下げられることになり、音楽館を守っている自然の防音壁が損なわれる恐れがあった。

これに対して 1993 年 12 月、神戸女学院環境保全委員会（委員長：保健室長・前多純）および大学教授会（学長・児玉佐智子）、騒音問題に直面する恐れのある音楽学部教授会（学部長・浜川洋子）が開発計画の見直しを求める要望書を市に提出した。この問題には筆者も環境保全委員として、また 1994 年度からは同委員長として関わっている。筆者の問題提起を受けて、大学教授会でも西側崖地問題委員会（委員長：川合真一郎人間科学部教授）を組織し、理事会や市、県との

折衝および法的問題や工事方法、自然環境保全に関する調査等を行った。本学の学生たちも「おかだやまトラスト」（代表・I3 三島亜紀子、現：立命館大学生存学研究所客員協力研究員）を結成して、自治会とともに工事差し止めのための署名や市議会の傍聴、要望書の提出など活発な活動を行った。当時の学院理事長・院長の城崎 進は、学生や学内諸組織の意見をよくくみ取りながら、西宮市との協議を慎重に進めてくれた。その結果 1994 年の終わり頃には、本学が崖直下の市有地を購入した上で簡易な擁壁を設けた防災工事を行い、西側の分譲地 2 筆の開発については女学院側の山林の掘削を最小限に止める形で市と協議していくこととなった。

西宮市はこの 2 筆の開発権を保持していたが、バブル崩壊後の長引く不況と翌 1995 年 1 月 17 日に起きた阪神淡路大震災の影響もあってか、その後も宅地として整備することなく現在に至っている。なお、この分譲予定地にはその後、兵庫県でも大変貴重な植物が生育していることが判明した。今津西線に面した 1 筆の北側、すなわち本学との境界部の急斜面に湧水がみられ、そのあたりにカヤツリグサ科のトラノハナヒゲが群生している（野嵜ほか 2009）。トラノハナヒゲは兵庫県では絶滅危惧種に指定されている希少種であり、海に近い湧水湿地を主な生育地とすることから、海成の洪積層である岡田山の歴史を物語る貴重な植物といえる。

上記のように、本学の自然環境保全に中心的な役割を果たしてきた環境保全委員会であるが、2012 年度以降は院長・森 孝一によって部長会附の諮問機関とされ、組織本来の機能を失って今日に至っている。岡田山キャンパスがもつ生態系保全、生物多様性保全、景観保全、環境保全機能等は一学校法人を超えた公益性や普遍的価値をもつと考えられるが、これらを正しく評価することができるような管理体制の整備が今後望まれる。

## 参考資料

- Comstock, J. H. *A classification of North American spiders.*, Comstock Publishing Co., Ithaca., 1903.
- Emerton, J. H. *Common spiders of the United States.*, Ginn & Company, Boston., 1902.
- 遠藤知二「神戸女学院岡田山キャンパスの昆虫相（Ⅰ）ーチョウ目およびトンボ目ー」神戸女学院大学論集第 67 巻第 1 号、2020 年、1-19 ページ。
- 藤田和夫・笠間太郎・市原 実・粉川昭平「西宮地方の地質と構造ーその自然史ー」『西宮市史、第 1 巻』（魚澄惣五郎編）、西宮市役所、1959 年、174-316 ページ。
- 兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課編『兵庫の貴重な自然：兵庫県版レッドデータブック 2020（植物・植物群落）』ひょうご環境創造協会、神戸、2020 年。
- 神戸女学院百年史編集委員会編『神戸女学院百年史 総説』神戸女学院、西宮、1976 年。
- 神戸女学院環境保全委員会編『増補改訂岡田山の自然』神戸女学院、西宮、1982 年。
- 神戸女学院高等学部理科学研究部編『岡田山植物目録』神戸女学院、西宮、1967 年。
- 中島涼菜「岡田山キャンパスにおける高等菌類相の研究Ⅱー2019～2020 年度の記録ー」神戸女学院大学人間科学部植生学研究室 2020 年度卒業研究提出論文、2021 年。
- 日本分類学会連合「日本産生物種数調査」（<https://www.ujssb.org/biospnum/search.php>）。
- 西原光恵「岡田山キャンパスにおける蘚苔植物相の研究」神戸女学院大学人間科学部植生学研究室 1998 年度卒業研究提出論文、1999 年。
- 野嵯玲児『神戸女学院岡田山キャンパス自然環境学術調査報告』神戸女学院、西宮、2010 年。
- 野嵯玲児「大学キャンパスが守る街の自然環境ー兵庫県西宮市ー」大学時報 No. 352、2013 年、88-89 ページ。
- 野嵯玲児・井坂真以美・奥谷絵梨子「神戸女学院岡田山キャンパスの脊椎動物相」神戸女学院大学論集第 68 巻第 2 号、2021 年、61-78 ページ。
- 野嵯玲児・熊取谷薫・北川智美・西原光恵「神戸女学院岡田山キャンパスの高等植物相（Ⅰ）総論および各論第 1 部ーシダ植物門・種子植物門、裸子植物亜門ー」神戸女学院大学論集第 52 巻第 3 号、2006 年、63-90 ページ（2006a）。
- 野嵯玲児・熊取谷薫・北川智美・西原光恵「神戸女学院岡田山キャンパスの高等植物相（Ⅱ）各論第 2 部ー種子植物門、被子植物亜門、双子葉植物綱、離弁花亜綱ー」神戸女学院大学論集第 53 巻第 1 号、2006 年、131-164 ページ（2006b）。
- 野嵯玲児・熊取谷薫・北川智美・西原光恵「神戸女学院岡田山キャンパスの高等植物相（Ⅲ）各論第 3 部ー種子植物門、被子植物亜門、双子葉植物綱、合弁花亜綱ー」神戸女学院大学論集第 53 巻第 3 号、2007 年、93-114 ページ。
- 野嵯玲児・熊取谷薫・北川智美・西原光恵「神戸女学院岡田山キャンパスの高等植物相（Ⅳ）各論第 4 部ー種子植物門、被子植物亜門、単子葉植物綱ー、補遺」神戸女学院大学論集第 56 巻第 1 号、2009 年、127-151 ページ。
- 野嵯玲児・森 美季・永野実里・野上佳代・西原光恵「神戸女学院岡田山キャンパスの野鳥」神戸女学院大学論集第 61 巻第 1 号、2014 年、61-91 ページ。

- 岡田山の自然編集委員会編『岡田山の自然：六甲山東麓の生物とその生態』神戸女学院百周年記念「岡田山の自然」出版委員会、西宮、1974年。
- 大川 徹「岡田山の菌類」『増補改訂岡田山の自然』（神戸女学院環境保全委員会編）神戸女学院、西宮、1982年、180-191ページ。
- 大川 徹・上田倫範「岡田山の生物－ヒメタイコウチの生態・飼育（その1）－」神戸女学院（中高部）紀要 Vol.6、1987年、42-69ページ。
- 瀬戸良三「岡田山の淡水藻類Ⅰ－教材研究として－」神戸女学院（中高部）紀要 Vol.2、1980年、49-56ページ。
- 瀬戸良三「岡田山の藻類」『増補改訂岡田山の自然』（神戸女学院環境保全委員会編）神戸女学院、西宮、1982年、174-179ページ。
- 竹中正夫『C.B. デフォレストの生涯－美と愛の探求』創元社、大阪、2003年。
- 植村 愛・奥田彩子「岡田山キャンパスにおける高等菌類相の研究」神戸女学院大学人間科学部植生学研究室 2007年度卒業研究提出論文、2008年。
- 上杉悠華「岡田山キャンパスにおける蘚苔植物相の研究Ⅱ－2019～2020年度の記録－」神戸女学院大学人間科学部植生学研究室 2020年度卒業研究提出論文、2021年。
- 矢野 空「岡田山キャンパスにおける帰化植物の生態学的研究－近年の動向－」神戸女学院大学人間科学部植生学研究室 2020年度卒業研究提出論文、2021年。
- （環境・バイオサイエンス学科教授）

# 神戸女学院大学の英語以外の外国語教育について

孟 真理

## はじめに

国際理解の精神を教育の柱の一つとして掲げている神戸女学院大学では、国際共通語としての英語に加えて別の外国語の学びを通じて、言語・文化・価値観の多様性に目を向けることを大切にしている。現在のカリキュラムでは、必修の英語（第1外国語）に加え選択必修の外国語科目（第2外国語）としてドイツ語、フランス語、イタリア語、中国語、朝鮮語の5言語（音楽学科は独仏伊の3言語）を提供している。全学科の学生が1言語を選んで初級2科目（「\*\*語(I)文法」および「\*\*語(I)コミュニケーション」）4単位を、総合文化学科では中級「\*\*語(II)」4単位を加えた計8単位を履修する。また選択必修以外の自由選択科目としてラテン語、ギリシャ語、スペイン語が開講されている。本稿では、このカリキュラムの原型が導入された1997年以前の議論にさかのぼり、英語以外の外国語教育の現在までの動向について、筆者自身の経験も交えて述べたい。

## 独仏2言語の時代

筆者が総合文化学科にドイツ語・ドイツ文学の担当教員として着任したのは1995年のことだった。当時、全学科の外国語科目のうち英語については英文学科が管轄し、第2外国語のドイツ語・フランス語の運営は、総合文化学科のドイツ語2名、フランス語2名の専任教員が担っていた。ちなみに独仏語の担当教員は1976年の社会学科改組・総合文化学科開設を機に、英文学科から移籍した。他に自由選択科目として中国語、朝鮮語、ラテン語、ギリシャ語が、また音楽学科声楽専攻学生向けにイタリア語が開講されていた。筆者が最初に担当したのは総合文化学科向けのドイツ語初級クラスだったが、非常勤講師と連

携した週2回の授業で前期に「(I)G」(文法中心)、後期に「(I)R」(講読中心)という密度の濃いプログラムで、コンパクトな時間数でも1年次終了時にはある程度の読解力を身につけることが目指されていた。ネイティブ教員による選択授業も並行履修できたが、どちらかというところ中級講読や専門分野の外国語講読の前提となる、専門基礎としての機能をもつプログラムだったといえよう。他学科では総合文化学科に比べると緩やかな進捗で、通年で(I)Gと(I)R2科目を並行履修していた。とはいえ文学部英文学科でも、選択必修6単位に加え、独仏上級段階やギリシャ語・ラテン語を専門科目に算入できるなど、やはり専門性を指向する多言語教育が意識されていたことが、カリキュラムから読み取れる。音楽学科声楽専攻ではイタリア語2単位を含む6単位、音楽学科の他専攻と人間科学科では4単位が選択必修であり、主として学科別のクラス編成によって、学科にあわせた外国語教育が行われていた。

### 多言語体制の始動

1990年代は、大学設置基準大綱化(1991年)を受けて多くの大学でカリキュラム改革が進められている時期だった。本学では1993年に家政学部を改組して人間科学部人間科学科が開設されたが、その完成年度をめざして一般教育の改革の議論が進みつつあった。その一環として英語以外の外国語科目に関しては、選択肢の多様化と内容の現代化が検討され、1993年度末には以下の基本方針が出されている。「1)第2外国語として、フランス語、ドイツ語のほかに、中国語、イタリア語、朝鮮語を設定する。2)科目内容を、時代や社会に対応した、実践的で興味深いものにする。3)学生の能力に応じて学習コースを多様化する。4)オラルの能力の充実、発音の授業の拡張をはかる。」<sup>①</sup>

この方針に基づいて1997年度入学者から、第2外国語の選択肢に中国語、朝鮮語、イタリア語(ただし音楽学科はイタリア語のみ、総合文化学科ではイタリア語は1998年度から)が加えられた。英文学科では第2外国語の必修単位数を2単位減らして人間科学科、音楽学科(声楽専攻を除く)と同じ4単位とした。また、多言語化にともないクラス編成は全学科混成となり、総合文化学科の学生も1年次は(I)Gと(I)Rの2科目を通年で学ぶようになった。

全国の大学の動向に目を向けると、第2外国語の多言語化は1980年代の終わりごろからすすんでおり、本学の改革もその流れに乗っている。1998年の全国調査<sup>②</sup>によると、履修者数は多い順に中国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語（全国女子大では中国語、フランス語、ドイツ語、スペイン語）であった。韓国・朝鮮語が選択できる大学はまだ少数であり、イタリア語に至っては「その他の言語」に分類されていた。イタリア語を第2外国語として学べる大学は現在でもさほど多くはなく、音楽学部を擁する本学ならではの特徴となっている。一方スペイン語の導入に関しては本学でも話題にはのぼったものの、当時は自由選択科目としても開設していなかったことから見送られた。スペイン語の開設はかなり後の2009年のことである。

多言語化とあわせて、科目内容の現代化（方針2）が図られたのが、特に初級の「\*\*語(I)R」である。読解力重視を意識させるR(Reading)という科目名称に代えて、「初級応用」というさほど一般的ではない科目名を採用したのも2000年より少し前のことだった。様々な議論があって独仏伊では「初級応用」、中国語は「閲読」、朝鮮語は「会話」と、名称は統一しなかったが、文法クラスで得た知識を土台に、実践的言語活動を通じて「聴く・話す・読む・書く」の4技能を習得し、また異文化理解を促進するという目標は、どの言語においても共通していた。この科目コンセプトの基本は現在まで保たれている。新たに第2外国語に加わった伊中朝の3言語ではこの科目を原則ネイティブスピーカーの非常勤講師が担当し、独仏でもネイティブ講師の担当を徐々に増やしていった。この科目は2024年度から「\*\*語(I)コミュニケーション」と改称し、言語間の統一と科目コンセプトのさらなる明確化を図った。また中級（総合文化学科で2科目選択必修、他学科は自由選択）に関しては、独仏伊においては内容・目的の異なる複数科目から選択でき、中国語・朝鮮語では文法・講読科目とネイティブ教員担当科目の双方にまたがって学ぶシステムとなっている。

方針3、4に関しては、AVライブラリの整備があり、語学自習教材の設置や視聴覚学習用ブースが確保された。ごく小さなスペースではあるが、英語教材とあわせ、その他の外国語の音声教材や検定試験用教材も学生が自由に使えるようになっている。また海外語学研修に関しても、1997年から英語圏とあわ



セフランス語海外研修（隔年開講）が単位化された。この研修はもとはフランス語担当の教員が正課外の活動として実施していたもので、その実績を踏まえ大学の正規プログラムとして認められるようになった。2000年代以降は、中国や韓国における語学研修も主に国際交流センター主導で順次開始され、単位認定されている。ドイツ語やイタリア語の研修プログラムは、筆者自身の力不足もあって残念ながら現在まで開設できていない。

### その他外国語委員会の役割

第2外国語の多言語化に伴って浮上したのが、科目運営の問題である。提供科目の言語や言語教育に精通した専任教員が必ずしもいない状態が、選択必修科目の運営体制として適切なのか、当初から言語担当教員の間では不安視されていた。さいわい1997年度に総合文化学科に東洋史分野では中国史、西洋史分野ではイタリア史をそれぞれ専門とする教員が着任し、この2名が中国語・イタリア語の第2外国語としての立ち上げにあたって大きな役割を果たした。朝鮮語に関しては、2024年に韓国語を母語とする専任教員が着任するまで、長らくこの言語に通じた教員が不在であった。また学科として「外国語教育担当」を前提とした人事枠を持たないため、専任教員の退職によってある言語の担当者が不在となる事態が、朝鮮語以外でもしばしば生じている。

こうした不安定な体制を補うため1998年、総合文化学科内に「第2外国語委員会」（のちに「その他外国語委員会」）を立ち上げ、英語以外の外国語科目に関する事項を共有する体制が作られて、現在に至っている。言語教育科目を担当しない教員も含め、文学、歴史学、哲学、国際関係論、社会学、美学・芸術学、経済学、日本語教育学などの分野の数名が分担して、各言語の責任者（コーディネーター）を務めてきた。各言語責任者は担当言語の非常勤講師と密に連絡をとりながら科目運営にあたり、また委員会として外国語科目全般にわたる諸問題に取り組んできた。外国語教育の質保証のために委員会が行ってきた事項として、例えば科目内容・到達目標の調整、成績評価のガイドライン検討、第2外国語授業に関する学生向けアンケート実施などがある。フランス語やドイツ語では、文法クラスの共通教科書・推奨教科書の設定を試みた時期もあった。と

もあれ開講クラスの大部分（言語によっては全クラス）を非常勤講師に頼る本学の体制には困難も多く、教育水準の維持にあたってはむしろ多くのベテラン非常勤講師の方々の献身によるところが多い。

自由選択の外国語（第3外国語）も委員会が立案しており、隔年開講だったラテン語・ギリシャ語の毎年開講への変更や、スペイン語の新規開講にこぎ着けた。その一方で、自由選択科目（第3外国語や各言語上級科目等）においては、履修者不足のため開講できなくなる事例がしばしば生じている。社会における英語重視の風潮のなかで、英語以外の外国語を学ぶ意義や魅力をいかに学生にむけて発信していくか、またプログラムやシステムをどのように時代に合ったものとしていくかが、委員会として今後も継続的にとりくむべき課題である。

### 東アジア言語への関心

学生の第2外国語選択の動向と開講クラス数の推移を、簡単に見ておきたい。学科が指定した言語の中から何を選択するかは、学生が自由に選ぶことができ、人数制限は設けていない。そのため、その他外国語委員会では、予測される履修者数に応じてクラス数を毎年調整している。

多言語化の当初から、中国語に履修者が集まることは想定されていた。一方イタリア語や朝鮮語については手探りで、全学で1クラスずつの設定からはじまった。別表には多言語の提供体制が整った2000年度以降の開講クラス数（選択必修に算入される科目のみ）の大まかな推移を示している<sup>③</sup>。

クラス数推移（選択必修単位となる科目のみ抽出）						
年度	2000	2005	2010	2015	2020	2025
ドイツ語	17	14	15	16	13	13
フランス語	24	22	17	16	14	15
イタリア語	15	16	16	17	16	15
中国語	26	26	24	22	26	26
朝鮮語	4	14	17	19	21	22

この表からも見て取れるように、中国語は当初から履修者の最も多い言語と

なった。なお中国語履修者数は、日中関係が悪化した時期には一時的に減少するなど、他の言語にくらべると政治・社会情勢に影響される側面があるようだ。選択動機が実用性や将来のキャリアへの期待と結びついていることがうかがわれる。朝鮮語履修者は、当初は少なかったが 2000 年代後半から急増し、現在もなお増加傾向にある。2000 年代の第 1 次・第 2 次韓流ブームを経て、今や韓国語・韓国文化がごく身近なものとなっていること、高等学校でも韓国語を学ぶ機会が増えてきたことなどが、要因としてあげられる。こちらは主として文化的関心と連動しているようだ。イタリア語は開設当時から一定の関心を集めており、大きな変化は見られない。減少傾向にあるフランス語、ドイツ語履修者と同程度の人数となっており、ヨーロッパ言語との接点も「親しみやすさ」が動機づけのひとつになっていることがうかがわれる。むろん学生の立場からは、習得のしやすさ（難易度）も選択基準として大きいだろう。

とりわけ歴史的にも地理的にも近い東アジアの言語や文化への関心の高まりは、自然なことといえる。また「実用性」を使用機会と捉えるならば、国内でも日常的に接点のある言語は、学習のモチベーションを維持しやすい。今後この傾向はおそらく大きくは変わらないだろう。

### 総合文化学科における多言語教育

総合文化学科では、学科設立当初から複数言語の習得を重視し、第 2 外国語については他学科より多い 8 単位を 2 年間で履修する教育課程を編成している。また専門科目においても外国語を重視してきた歴史がある。1999 年までは、2・3 年次で語学ゼミ（Ⅰ）（Ⅱ）を必修とし、英語、第 2 外国語または古文による専門分野の原典講読を全員に課していた。この体制は 2000 年から 2003 年のゼミ改革の際に改められ、「語学ゼミ（Ⅰ）」はアカデミックな日本語運用能力を育てる「文献ゼミ」に変更、また「語学ゼミ（Ⅱ）」は廃止された。これにより学科の専門科目において外国語は必須ではなくなったが、代わって全学向け外国語上級科目「\*\*語（Ⅲ）」を、専門科目（メジャー科目）「外国語特殊研究」（のちに「外国語セミナー」）に転換した。科目内容も外国語運用能力に加えて現代社会や言語文化の理解によりシフトしたものとなり、3 年次以降も外

国語の学びを深めたい学生のさまざまなニーズ（語学スキル、地域文化への関心、専門分野の必要、留学や進学準備等）に応えている。このほかにも学科カリキュラムの中で、アイヌ語や新約聖書ギリシャ語など言語を学ぶ科目が提供されている。

人文・社会科学の諸分野に多角的視点からアプローチすることを主眼とする総合文化学科の教育課程にとって、1・2年次で英語に加えてもう一つ別の言語体系をある程度集中的に学ぶことは、実践的な運用能力の養成にとどまらない重要な意味を持っている。日本語と英語に加え第3の極を獲得することで、自文化と異文化という二項対立から解き放たれ、言語がかたちづくる文化それぞれの独自性や複雑さに対する理解と敬意をもつこと、ひるがえって日本語によって構築されている自文化を客観的に見るまなざしを獲得することが、求められている。

こうした要請はむろん総合文化学科に限定されるものではなく、神戸女学院大学の掲げるリベラルアーツの精神ともかさなりあう。全学科の学生にとって第2外国語の学びが、多様な他者との対話の精神をはぐくむ意義深い場であり続けることを期待して、本稿を閉じたい。

#### 註

- ① 1994年3月14日教授会資料「カリキュラム改革案」
- ② 「全国事務系大学生・非英語外国語（第二外国語）選択状況調査結果報告書」平成10年12月 株式会社毎日コミュニケーションズ
- ③ 言語によって1クラスあたりの人数が異なるため、この表は履修者数を正確に反映したものではない。提供体制等の事情から、ヨーロッパ言語よりも東アジア言語の方がクラスサイズは大きめである。

（総合文化学科教授）

# 神戸女学院中高部の英語教育

—1993年4月～2020年3月—

林 真理子

神戸女学院中高部のホームページには英語教育の方針として「英語で心が通じ合えることを目標に」という副題がついており、80年以上も前から続く中高部英語教育の根幹：Crew Method（以下クルーメソッド）による英語教授法が謳われている。クルーメソッドについての論文はすでに多数存在するので、本稿では主に私が在職した1993年4月から2020年3月の英語教育について述べてい。

クルーメソッドの理念は不変だが、実際の授業での活用は時代背景や生徒のニーズ、英語科各教員の個性により多種多様に肉付けされ、深化されてきた。中高部英語教育に影響を与えた時代の変遷を羅列すると、他大学受験を目指す生徒の増加、中学部入学当初から学習塾に通う生徒の増加、いわゆる「ゆとり教育」の導入に伴う、学習指導要領に盛り込まれる語彙や文法事項の減少、小学校での英語教育義務化、入学以前にバイリンガル教育や英会話レッスンを受けたり、海外に滞在していたりした生徒の増加等が挙げられようか。それに伴い、英語科では、既修者も初心者もそれぞれが授業を楽しみ、着実に英語力をつけられる授業の模索が始まった。現在も多様な生徒に柔軟に対応できるよう、工夫を凝らしつつ、神戸女学院らしい英語教育の追究が続いている。

次に、クルーメソッドの特徴が一番よく表れている中学部の授業内容を簡潔に説明する。授業は原則として全て英語で展開される。中学部1年生（以下中1）では主に耳から単語や基本的な文、まとまりのある話を導入し、幼児が母語を獲得するような過程で英語を習得することを大切にしている。1時間目に

インターナショナル教員と日本人教員のペアティーチングで新しい教材を導入し、次の時間に日本人教員が時にはクラスを2つの小規模集団に分けたり、LLを使用したりして、復習中心の授業で学習内容の定着、深化をはかる授業形態が基本である。中1終了時までには英語の基礎構文や表現に数多く触れ、帰納的に英語の仕組みを理解するようになる。また、まとまりのある文を聞き取り、内容を理解したり、詩を暗唱したり、既習の単語や表現を用いて簡単な文章を英語で書いたりできるようにもなる。中学部2年生、3年生（以下中2、中3）になると、3人の担当教員が個々の進捗で授業を展開するので、進捗が早くなり、新出単語や表現、構文が増え、言語活動の幅も広がる。まとまりのある文章の導入も徐々に耳から活字を媒体とする活動にシフトしていく。中3になると、インターナショナル教員の授業が増え、まとまりのある英文を書いたり、簡単な議論をしたりする機会もできる。このような活動の結果、中3終了時までには実用英語検定の準1級、2級、準2級に合格する生徒が多い。

上記のような中学部の英語教育の過程で、時代の流れにより変化した部分を述べたい。1つ目は単語や表現、発音記号である。bib, trousers等北米地域で使用頻度が低くなったものは他の語に置き換わった。ジェンダーの多様性やマイノリティへの配慮に伴う議論が起こると、先住民の呼称や国名、Mr./Miss/Mrs./Ms.の使用も変化した。“Everybody has ( ) own computer.”のような文の( )に入る人称代名詞をhis/herにすべきかtheirにすべきか、アメリカ式のスペリングや語句表現だけではなく、他の英語圏の国や地域のものについて授業で導入するか等について議論もあった。特に低学年に教えると混乱を招くと思われる内容についてはわかりやすく工夫して指導している。言語は生きているので、このような変遷は今後も生じるだろう。

発音記号の扱いも時代の流れとともに変化した。私の中1だった1960年代後半には、1学期の中間考査で絵を見て英単語を発音記号で書く問題が出題されていたが、最近では、発音記号は正しく発音するために識別できればよいという考え方に代わり、発音記号で単語を書かせる問題は激減した。

2つ目は授業形態の変化である。21世紀になり、感染症やアレルギーへの対

策が求められる様になり、実施困難になった授業もある。クレーメソッドでは、語学初心者が、できるだけ絵や写真ではなく実物に触れ、五感をフル活用して理解を深化させる体験型の活動を大切にしている。この観点に立った”Oh My Darling Sugar Cookies”の単元では、インターナショナル女性教員と日本人教員が歌を歌いながらクッキー生地の見せ方を見せ、授業後にクッキーを焼いて、生徒に配っていたが、現在では以前と同じ授業展開ができなくなった。

3つ目は教材の変化である。以前はほとんどすべての教材が教員作成のプリントや音声教材であった。しかし、生徒から、英語教員の大多数が女性で CD 教材等の男性の声が聞きづらくて困るという相談が多くなったため、2000 年代から中 2、中 3 の家庭学習教材として開成中学校・高等学校教諭 Daniel Stewart 氏監修の *Blue Book, Red Book* というリスニング教材を家庭学習課題として導入し、10 代の男女ネイティブスピーカーの会話を毎週聞き、復習テストで理解を確認するようになった。(付記：2021 年度から中 2 では TOEFL Junior 対策のできるリスニング教材を、中 3 ではそれに加え、National Geographic 社の *Pathways* を使用し、listening, speaking, critical thinking を強化していると、中高部英語科：稲垣教諭からご教示頂いた。)

加えて、中 3 では重要構文の復習や読解のスピード化のための家庭学習教材が必要であるという議論が 1990 年代にあり、その結果、英語科教員全員で *Trifolium* というオリジナル教材冊子を作成した。この冊子はよりよい内容にするため定期的に改訂している。

4つめに、パソコン（以下 PC）の普及により、教材のデータベース化、教員間の情報共有やデータ管理が飛躍的に進んだ。中学部では教科書を用いず、教員作成のプリント教材で授業を進めるので、教員によって授業で取り上げる単語・表現・文法項目が異なり、以前は次年度担当者からどの単語や表現が既習かわからないという声がかかることがあった。しかし現在では、毎年授業で使用した新出単語、表現をデータ化し、共有フォルダーに保存し、次年度の担当教員がそれを参照して授業計画を立てている。また、担当教員作成のプリント教材や長文では、教員が原文を授業展開に合わせて書き換えたものを使用して

いるが、毎年、新しい教材を探し、一から作成するには時間と労力がかかるし、過去に作成された教材の中には、他の教員も共有したいものが多かった。PC普及のお陰でこのような教材のデータベース化、共有も可能になり、労力を削減することもできた。中1後半に口頭で導入される聖書の中にあるお話、中2、中3で段階的に文字による導入に切り替えるために使用しているお話を多数蓄積できると、多様な作品を取り入れることができる。最近の生徒は古典と呼ばれる文学作品に触れる機会が減少しているので、時事的な内容の説明文や記事に加えて文学作品を紹介することによって生徒の視野も広がると思う。

5つめはLLの活用である。2014年にヴァージニア・クラークソン記念館が完成し、LL教室が2室になった。すべてのブースにPCが設置されたので、LLでの授業がより多様に展開できるようになった。以前は生徒の音声を録音する際、機器の不調によるトラブルがあったが、現在では教員がマスターコンソールを操作することにより、簡単に一斉録音できる。録音した音声のデータ保存や編集も容易になったのでシャドーイング練習や暗唱も効率的にできるようになった。画像提示装置、ランダムペア作成機能の活用によりペア活動や Show and Tell の活動もわかりやすく実施できるようになった。

英語動画もLLで見せることが多くなった。以前は映画や教育教材のDVDを見ていたが、21世紀になると簡単なニュースや英語文化に関する無料で良質なオンラインコンテンツが多数授業で使用されている。個人的には低学年では、画像のない音声教材のほうが、内容に集中し想像力を養うのに適していると考えているが、良質な映像教材は、楽しみながら語学学習を進め、英語圏の文化を学ぶのによい教材であり、今後使用頻度が益々増えると思われる。

一方、クルー先生 (Angie Crew) の時代から現在まで脈々と続いている活動もある。例えば、有名な詩の暗唱や英語劇、英語の歌は、授業で頻繁に取り入れられている。詩のリズムや美しい言葉に触れ、英語のメロディを体に取り込むことは、特に初級学習者に必須であると思う。発音やリズムの練習として tongue twisters も取り入れられている。歌は中1で紹介される讃美歌や簡単な身振りのついた童謡に始まり、中2、中3ではスタンダードナンバーから最近



のヒット曲まで網羅している。音楽好きの生徒も多く、リズムや言葉の流れから英語という言語を体感し、より自然な形で英語を聴いたり話したりできるようになる生徒が多くなったように思う。卒業生からは「英語の詩や歌の授業が楽しかった。歌詞や暗唱した詩の一節は今も覚えている。好きな作品は自分の子供にも紹介し、一緒に楽しんでいる。」という声を聞く。

インターナショナル教員が一人で中2、中3の授業を担当することも不変である。生徒参加型の活動を通して4技能5領域（聞く、読む、話す〔やり取り〕、話す〔発表〕、書く）の総合力を養成するだけでなく、英語を母語とする国や地域の文化を体験させることに注力している。季節ごとの行事関連の活動や、ファッションショー、ロールプレイ、アメリカ式の模擬卒業式等を各教員が工夫を凝らして実施している。語学学習はその言語を母語とする集団の文化を学習するということであると体得した生徒の中には、卒業後、様々な国でこの体験を応用して言語と文化を学習し、国際的な活躍をする人も多い。

英語科では、上述の中学部教育の集大成として、中3生の習熟度を測り、高等学部での学習に繋がりたいと、1990年代から3学期に Achievement Test を実施していた。中3担当の中高部教員が既習単語や文法事項等を考慮し、手作りの問題を英語科全員で検討して最終稿にし、読解、単語、文法の力を測る問題と、リスニングやライティングの力を測る問題に分け、2回実施していた。しかし、担当者によって問題の難易度が異なることがある、英語運用能力の客観的な判断材料が必要である、生徒各自の目標設定のためにわかりやすい目安が必要であるという議論の結果、2020年度から、3月に中2、中3で TOEFL Junior を実施するようになった。実用英語検定のように合否ではなく、スコアで結果が示されるので、生徒各自が英語力向上の具体的な目標を設定するのに適していると思う。

次に、高等学部での英語教育についても触れたい。和文英訳や要約、英文和訳や要約、複雑な文法事項の説明等、より高度な英語力を養成するため、「授業は原則としてすべて英語」というルールに縛られなくなる。2000年代初頭までは、日本人教員による長文読解中心の授業、文法解説や英作中心の授業、イン

ターナショナル教員によるオーラルの授業に分かれていたが、最近では5領域4技能の総合力を養うべく、1つの授業で1～2領域のみを扱うのではなく総合的な活動を扱うようになってきている。生徒の大多数が他大学受験し、中には海外の大学への進学を目指す人もいう現状の中、多様な大学入試にも対応し、卒業後、海外の人びとと英語でコミュニケーションをするだけでなく、英語で専門分野の議論をしたり、英語文献を読んだり書いたりできる英語力の基礎を身に着けることを目標に、より高度な英語活動を実践している。

私は高等学部2年生や3年生（以下高2、高3）の授業を担当することが多かったので、授業の形態としては、検定教科書は速読教材として扱い、発展教材として、関連テーマのオリジナル教材を用いることが多かった。最初に重要構文の確認や英作等の演習でウォーミングアップ、次に長文読解、最後にテーマについての自由英作やエッセイの課題を出し、各生徒が調べ学習をしてまとめた文を書き、理解を深めるという授業展開であった。アメリカの映画や TED Talks、オンラインコンテンツも時々教材として用いた。*Wonder*、*Patch Adams* の映画は特に生徒に好評で、鑑賞後に生徒たちが書いたエッセイも秀作が多かった。エッセイを家庭での課題にした場合は手書きする生徒が多かったが、授業中に各生徒がPCでテーマに関連した英語文献を検索したり、オンライン辞書で表現を調べたりして仕上げる場合は、スペリングチェックや語数表示の機能を利用し、自由に書き直しできるのでWordでエッセイを書くのが標準となった。

1990年代前半までは高3に英語科教員作成の読解・和訳・英作等の実力テストを課し、神戸女学院大学への進学補助資料としていたが、その後 TOEFL ITP Level2 に代わった。しかし満点をとる生徒が続出したため Level1 に変更された。現在はよりきめ細かく、生徒の英語到達度を測り、生徒自身が学力向上のための目標を設定できるよう、高1の9月には TOEFL Junior を、高2、3の9月には TOEFL ITP Level 1 を全員が受験している。例年、本校生徒の TOEFL ITP の平均は、677点満点中500点前後で、生徒の約2分の1が500点以上を、約2割が米国大学留学基準点とされる550点以上の得点をとって

る。最近では海外の大学に進学する生徒が増加傾向にあり、大学入学後に留学する人も多いため、国際標準のテストを定期的の実施することが今後も必要であろう。

このように中高部の英語教育を学んだ生徒は、言語を単にコミュニケーションツールとして習得するだけではなく、それを媒体に世界中の人たちと心を通わせ、専門分野の研究を深め、新しいものを創造し、発信し続けている。「中高部の英語教育で体得した学習法はどの言語にも応用でき、世界のどこでも繋がりを広げられるという自信につながっている。」という大勢の卒業生の言葉を励みに、中高部の英語教育が益々発展し、生徒たちにインスピレーションを与え続けるよう祈念して、筆を置く。

(元中高部長)

## 神戸女学院中高部の理科教育について

大川 徹

学院の史料室から「神戸女学院中高部の理化学教育について」私の在任中のことを前任者のことも含めて約半世紀にわたる変遷を回顧録風に書いてほしいという依頼があった。

理化学という言葉が気になったので、このことについてまず前書きしておきたい。

一般に日本の高等学部の理科では物理・化学・生物・地学の4科目、中学部では第一分野で物理・化学、第二分野で生物・地学の分野を学ぶことになっている。だから理科学ならまだしも理化学では誤解を招きかねず、決して化学分野にのみ重きを置く理系の講義ではなく、理科のいわゆる4科目（物理・化学・生物・地学）を、基本的には対等に学年を考慮して学ぶようになっている。

なお大学以上の教師の名称は教授が基本だが、高等学部以前は教諭となって教員免許がいる。また大学は学生に授業をし研究も大きな仕事であるが、教諭には生徒の生活指導も大きな仕事である。特に後者の仕事が増えると授業どころでなはないことが多い。文部科学省（以下、文科省）的には正確には学生は大学生以上、生徒は高等学部以前で使われる。ここが大きな違いなのだが一般には中高生も学生と思っている。このあたりから間違いも起こりやすい。

しかし世の中の移り変わりや、大学受験での受験時の点数の取りやすさなどに影響され、最近では化学・物理・生物・地学の順に履修者が増加している傾向が見られ、受験的には物理や化学は計算問題で数学が得意だと有利だという。生物は暗記物が多く高得点を取りにくいということである。医学部志望のものが年々増加しているが、この傾向が強くなってきている。残念で奇妙だが生物を履修しないで物理・化学のみの医学部希望者が多い。

だから化学の履修者が多く、物理・生物がそれに次ぎ、地学が少ない。

このように最初に理化学への誤解を説明したが、神戸女学院の理科教育の大きな特徴に科目的な優劣は基本的にはない。

しかし次のような特徴があると思われる。

① 生物的環境、特に周辺の岡田山には優れた生物的（植物的・動物の）自然が残されているので、教師にやる気さえあれば、その特徴を活用した授業が容易である。植物を基本に生態系の話も可能である。

② 建物的環境も、百周年記念に新築されたタルカット記念館（以下タルカット館）ができてからは、以前とは雲泥の差の見違えるような理科設備になった。

タルカット館ができるまでは、1号館（葆光館）の2階の東端の教室と東の空き地に臨時に増設された2号館（現在はクラクソン記念館に建て替わっている）の計2つで4科目の授業をなんとかこなしていた。

化学の実験室のみ専用であったが古かった。物理・地学の物品は部屋の外や内に所狭しと置かれていた。生物のみ、2号館を使用できたので空間的にはまだましな方であった。それでも狭いので2号館の屋上に臨時のプレハブ室をもうけ、私は主にそこにいた。

大学が廃棄しようとした動物標本を大事な備品として譲り受け、それらは陳列棚に押し込められていたが、今はタルカット館の廊下などにきれいに陳列され、毎年虫除けの管理もされ、移動時にいつも見えるようになっている。だからカモノハシ、雷鳥の夏羽・冬羽標本、鳥のくちばし標本、蛇・猿・鶏などの骨格標本など貴重な珍しいものが今もある。

残念だが、大学部より譲り受けて大事に保存していた多くの標本のうちで、液浸標本のほとんどが阪神淡路大震災の時にガラスが割れて何日も放置せざるを得なかったのが放棄せざるを得なかった。これは誠に残念であった。大きなナメクジウオの液浸標本などもあったが。

なお当時は化学の授業が重なったときは各クラスへ薬品を運んで教卓で演示実験のみで済ませ、生徒も自ら実行することは無理であった。

その後タルカット館が新設され、物理と地学は4階に、生物と化学は3階に、それぞれの講義室、準備室（研究室を兼ねる）、実験室を構える基本的には文科省

の施工基準に見合う設備を持つことができるようになった。

なお1号館からタルカット館への廊下周辺には陳列棚が設置され観察が常時可能となったが、また1号館からタルカット館への小道、玄関前の一部が生物科の圃場として使えるようになったので実験材料などの栽培も可能になった。

③ 文科省の基準では物理・化学・生物・地学の各科に一人の助手が配置されている。公立はクラス数が多い。神戸女学院は1学年3クラスから4クラスである。だから助手は全科目で一人に制限されてしまった。一人で全科目の準備、後片付けをこなすのは大変であったが昔からこれで通してきた。これは教員への準備、後片付けを強要した。あるいは観察・実験などの縮小・工夫をせざるをえなかった。

④ 個々人の教師がそれぞれの考えを持ち、かつ文科省からの指導要領、教科書があるから、それらから逸脱するような内容では普通教えられない。しかし神戸女学院の生徒は一般的に理解力にすぐれている者が多い。だから独自の発展的なものも加えて教えようとしても可能である。つまり少々派生しても理解ができる生徒が大勢いる。教科書そのままの授業では不満を感じる生徒も多い。だから理科的な出来事があればできるだけそのことに触れて知識の発展を期待できた。

地震の時は地震について、皆既日食の時は時間割を融通して観察を、など。

⑤ 建物周辺の自然環境に恵まれているし、ガードマンもいてキャンパス内も安全なので、野外観察と並行して学ぶことができる。特に生物では中学1年から野外観察から入るように努めた。

⑥ 夏山登山は自由参加の年間行事の一つであるが、できるだけ参加をし高山の植物、岩石の様子などを直接見ること、満天の星を見ることを推奨し、教師自らも率先してスタッフになるように努めた。

⑦ もっと時間を取って観察実験などもしてみようとする生徒には、クラブでできるように生物部、理科学研究部（理研）、化学部などで放課後や合宿での機会をもうけた。

⑧ 個人的には有名大学の有名学部・学科を受験したいという生徒もいて、彼女たちは塾に行くべきか迷っていたので、行かなくても大丈夫なような指導も別途した。

⑨ 神戸女学院の建物はメレル・ヴォーリズ氏 (William Merrell Vories) が、ここで学ぶ人達が学生時代を過ごす間に建物からもプロの視覚的バランスなどを学び身につけて、それで社会に出て、その影響を他の人にも与えてほしいという願いで設計されたキャンパスである。だから、そのプラン、建物、細部の使い勝手、デザインなどから影響を受けている。そのことは本来は知らず知らずのうちに気づくのであるが、こういう意図を持って建てられているのだということ野外観察のついでに知るようにもした。

大きな特徴は上記した9項目と思われるが、それらを実施できる教員広げて職員も、このような考え方を理解しておいてほしいというのが包括的な願である。

そのためには

- 1.教員も職員も共にヴォーリズ氏の意図を理解しておく必要がある。桜が咲いてきれいだけでなく、なぜそこにその桜があるのかを知っておく必要もある。
- 2.教員は勉強したい生徒に答えられるだけの実力を持つように常に努力しておく必要がある。学会に属し論文を書き、自分も学ぶ者の一員となるように努めてほしい。この行いが生徒への刺激にもなって生徒の学習意欲を高めると思うからである。また学会に出て教科書に載っている事項の現位置を知るように努め、生徒への参考になる事項を提供できること、教科書執筆者の先生との出会いなども話せるようなことも大切である。そのための場として学会への参加が認められており、中高部独自の紀要発行の予算も獲得しているのだから。そして質問に来る生徒に進学先の教師的・勉学的事情も具体的な進路として答えられるような伝達者になることもあるべきことである。教科書の内容だけ教えていけばよいという安易な形式的な先生でいては、時として生徒学生に遅れを取って困ることがあるからである。

- 3.施設課の草木の剪定のスケジュールは、それぞれの行事の前や、夏休みや冬

休みの期間が多い。しかしこの時期の中には、教師側にとって野外の植物を利用して授業ができる時期と重なる時もある。せっかく観察授業の参考にしようと思っても先に刈られてしまっはせっかくの環境が生かし切れない。ここは話し合って剪定日を決めて利用できるものは適期に利用したい。全面的剪定にするのか一部にするかなども相談して決めてほしい。学校の庭は個人や公園の庭とは違うのだから。

4. 子供を教育すると同時にその保護者の理解も同様に向上させたい。

神戸女学校の卒業生で教える教師の授業をかつて受けた経験のある保護者には、自然と自分が昔学んだことがその子供にも伝わる可能性が高いが、初めての生徒にはその保護者から教育していくのが得策であると思われる。

神戸女学院の特徴は、まずその建物とその配置である。まずキャンパスのゾーニング（区分け）、各建物の配置・詳細、それから周辺の植物、記念樹など、そしてそこで育まれる視的バランス、心的バランスの感覚など。

このところを生徒の家族にも関係者にも理解してほしいと思うので、PTAのPの方への働きかけも重要である。

つまり学校だけの教師 T だけではなく保護者 P をも交えた一貫教育が重要で、また機会的にも可能であるから、大いに協力すべきである。

環境が育む教育的効果を生徒同様に習得してこそ、神戸女学院らしい理科教育といえよう。

5. 神戸女学院大学部と中高部とは、基本的には一貫教育である。この根幹は昔から変わっていない。

しかし大学部のカリキュラムの変更やそれに伴う学部学科の変遷で、50年前はほとんど本校の大学部へ進学していた生徒が、化学や数学が本学進学に必要でなくなってからなぜか本学への進学希望者が急変した。児童学科がなくなった影響も大きい。平行して情報化学分野や医学部志望の学生が増加し進路希望もそれに連れ変遷していった。その結果として内部進学は極めて少なくなっている。中高部の理科としては、大学と、生徒・その保護者との間で、後者の要求にまずは応えざるを得ないのが現状である。 (元中高部教諭)



## 新学部・学科の設置（2024年度、2025年度）

中野 敬一

### 1. 3学部の新設

2024年度に「国際学部」と「心理学部」を設置した。いずれも新設ではあるが、既存学科の「独立」という表現が実態に即している。国際学部は英文学科が文学部から独立し、心理学部は心理・行動科学科が人間科学部から独立した。この2学部の完成年度は2024年度の新入生が卒業する2027年度である。

2学部に引き続き、2025年度には「生命環境学部」の新設を予定している。こちらも既存の環境・バイオサイエンス学科が人間科学部から独立することになる。完成年度は2028年度であり、生命環境学部の完成時に人間科学部という名称が廃止される予定である。

つまり、2028年度に本学は、国際学部（英語学科、グローバルスタディーズ学科）、文学部（総合文化学科）、音楽学部（音楽学科）、心理学部（心理学科）、生命環境学部（生命環境学科）の5学部6学科を有する大学となる。

今回の改組は前回の改組より比較的長い年月を経て実施された。4年制の新制大学として神戸女学院大学が認可されたのが1948年で、文学部（英文学科、社会学科、家政学科）が設置された。それから76年を経て、英文学科は初めての改組を行ったことになる。

また、家政学科が文学部から独立して家政学部になったのが1967年で、その家政学部を改め、人間科学部（人間科学科）を設けたのが1993年である。2005年に人間科学部では人間科学科の募集停止があり、同学部に心理・行動科学科と環境・バイオサイエンス学科が設置されて約20年が経ち、心理学部と生命環境学部に改組されたのである。

## 2. 各学部の主な特徴

### (1) 国際学部

英語学科は「言語科学」「通訳・翻訳・コミュニケーション」「英米文学文化」の領域。「聞く、話す、読む、書く」英語の4技能を鍛え、メジャー科目は99%英語を使う。

グローバルスタディーズ学科は、「持続可能な社会」「文化理解」「ジェンダー」に関連する課題を政治、経済、文化、社会の各側面から多角的に考える批判的思考力を養う。それと共に国内外のフィールドでの実践教育を通じて、積極的に課題解決に取り組む姿勢を養う。

### (2) 心理学部

「行動科学」、「臨床心理学」、「精神保健・福祉」の3領域を横断的に学習する。公認心理師と臨床心理士、精神保健福祉士の資格取得にも対応している。さらに心理・福祉系の専門職だけではなく多様な将来設計をも可能とする。

### (3) 生命環境学部

「環境科学」「生命科学」「情報科学」「サイエンスコミュニケーション」が学びの4領域である。各領域に「データサイエンス」を活用する。実験・実習を重視したカリキュラムがあり、理科教員や2級建築士・木造建築士受験資格など、バイオ・環境系の各種資格も取得することができる。

## 3. 改組に至る経緯

### (1) 改組の前提

本学は、長期目標・計画を策定して「これからの道標（2021~2030年度）」という名称で公表している。そこには本学の「目指す姿」（大学像と学生像）が示されている。目指す大学像は「豊かな人間性と国際感覚を育む、日本を代表するキリスト教主義リベラルアーツ女性大学」である。そして、目指す学生像は「21世紀にふさわしい教養と知性、高い語学力、そして『愛神愛隣』の精神を身につけ、どのような立場に置かれても十分に能力を発揮し、状況に立ち向かうことができる学生」と掲げている。

これらの「目指す姿」を実現するには、教育内容の継続的な見直しや検討を行い、時代に即した改革を進めることが重要となる。ただし、その前提条件として、本学の教育の伝統である「三つの柱」、すなわち「キリスト教主義」、「国際理解の精神」、「リベラルアーツ教育」を強化するための改革であることを各会議において確認してきた。流行や志望者動向を追うのではなく、あくまでも上述の「目指す姿」を実現するための教育に徹するということである。

## (2) 外的要因

昨今の日本社会で少子化が大きな問題であるのは疑う余地がない。18歳人口は1992年の205万人をピークに下がり続け、2024年には109万人となった。大学進学者は微増傾向にあるが、2026年の63万人をピークに減少局面に入り、2040年には46万人になると予想されている。ちなみに2024年現在の大学進学者数は61万人で、私立大学の6割は定員割れとなっており、多くの教育機関が将来を決して楽観視できない状況にある。

このような厳しい状況下で各大学は文字通り生き残り戦略を掲げ、独自の特色あるカリキュラムや社会からの要請に基づく新たな分野を探り、競い合うように新学部設置等の改組を次々に行っている。そのような動きを本学が無視できないのは当然のことであろう。

## (3) 教育内容の可視化

本学は高い専門性とそれを深めるリベラルアーツ教育を柱に据えて各学部・学科はカリキュラムの充実に努め、一定の高い評価を得てきた。しかし高校教員をはじめとするステークホルダーから教育内容を明示すべきだという意見が寄せられるようになった。学部・学科名からイメージされる内容と、実施されている教育内容に開きがあるという指摘である。

例を挙げると、英文学科は「英文学」のみを扱う学科だと誤解されることがある。しかし本学の英文学科には、英米文学文化、英語学、英語教育学、通訳翻訳学、グローバルスタディーズ等の充実したカリキュラムがある。この実態を可視化させるための方策として改組の検討に至った。

心理学部も同様である。心理・行動科学科が所属している人間科学部に「心

理」関係の学部・学科があることが外からは見えにくい。「心理」系の学部・学科をインターネット検索してもヒットしない。「心理」の存在をステークホルダーに強く認識してもらうためにも心理学部としての独立が検討されてきたのである。生命環境学部も心理学部と同様、人間科学部に所属していることで検索されにくい状況にあった。

#### (4) 主な会議等における経緯

##### 2021 年度

- ・英文学科グローバルスタディーズコースの教員を中心にグローバルスタディーズ学部（もしくは学科）の新設提案があり、英文学科で協議。
- ・10月、第1回大学将来計画委員会でその報告。同委員会は大学全体の改組計画を進めるために新たに「大学改革委員会」を設置することを決議。
- ・11月、第1回大学改革委員会で英文学科を「国際学部」とした改組を進めることを承認。
- ・12月教授会において国際学部を含めた大学改革構想を決議。

##### 2022 年度

- ・4月、心理・行動科学科、環境・バイオサイエンス学科がそれぞれ学部化を要望。
- ・5月開催の大学将来計画委員会において、人間科学部の学科改革に関する協議が行われ、心理・行動科を「心理・行動学部（心理学科）」、環境・バイオサイエンス学科を「生命環境学部（生命環境学科）」とすることを承認し、5月定例教授会において決議した。
- ・7月開催の臨時大学将来計画委員会において、「国際学部（英語学科、グローバルスタディーズ学科）」、「心理・行動学部」改め「心理学部（心理学科）」という名称で改組することを承認し、7月定例教授会において決議した。なお、環境・バイオサイエンス学科は引き続き検討する課題があるため2025年度改組に延期することにした。ちなみに2023年2月開催の臨時大学将来計画委員会において、環境・バイオサイエンス学科を「生命環境学部」とする改組計画をすでに承認している。

2023 年度

- ・10 月教授会 環境・バイオサイエンス学科を「生命環境学部（生命環境学科）」という名称で改組を行うことを決議。
- ・大学教授会の決議は、学院常務委員会、理事会、評議員会での承認を得た後、文部科学省に届出申請を行い、いずれも承認を得て学部の新設が認められた。

2024 年度は国際学部と心理学部が始動した。2025 年度は生命環境学部が続くが、2028 年度の完成年度以降も本学における教育のさらなる進化が欠かせない。目下のところ、次の改組を視野に入れた検討を行っている状況である。

（学長）

# 文学部総合文化学科のカリキュラム改編について

建石 始

## 1. はじめに（カリキュラム改編の背景）

少子化による志願者減少の影響を受け、神戸女学院大学は2021年12月ごろからさまざまな動きがあった。その動きの結果として、2024年に国際学部と心理学部が、2025年に生命環境学部が創設された。文学部総合文化学科についても、「文学部」という名称をどうするのか、「総合文化学科」という名称はそのままでもいいのか、「リベラルアーツ教育」をどう維持して広報につなげていくのかなど、さまざまな検討が重ねられた。その結果、学部・学科の改組は行わず、「文学部総合文化学科」を継続したままカリキュラム改編を行うこととなった。以下では、従来のカリキュラムのメリット・デメリットを確認しながら、新カリキュラムの特徴などを説明したい。

## 2. 従来のカリキュラムのメリット・デメリット

2024年度までのカリキュラム（以下では、「従来のカリキュラム」と呼ぶ）は2013年度から始まった。それまでのカリキュラムでは、「現代国際文化コース」「日本アジア・文化コース」「人文・ヨーロッパコース」「現代社会・福祉コース」という4つのコースが設けられていたものの、単位を取得しやすい科目のみを履修して卒業する学生がいたこと、総合文化学科の良さを外部に宣伝する必要があったこと、質の高い学生を確保しなかったことなどを総合的に判断して、従来のカリキュラムができあがった。

それは、「宗教学」「欧米の文化と歴史」「哲学・倫理学・美学」「社会学・メディア」「日本語・日本文学」「経済学・法学・国際関係論」「日本・アジアの文

化と歴史」「社会福祉・子ども」という8つの専攻科目群に分かれたものである。どの学生もその中から主専攻24単位、副専攻12単位を履修しなければならないため、このカリキュラムはいわば「ディシプリン型のカリキュラム」や「専攻重視型のリベラルアーツ」とでも呼ぶべきものとなった。

このカリキュラムによって専門領域が見えやすくなり、取得しやすい科目のみを履修して卒業する学生は以前に比べるといなくなった。しかし、主専攻24単位、副専攻12単位はあくまで推奨であること、「2つの専攻」は機械的な選択に陥りがちになっていたこと、組み合わせは本当に2つだけでよいのかなどの問題を抱えていた。

### 3. 新カリキュラムとは

#### 3.1 課題探究型のカリキュラム

そこで、新しいカリキュラムでは、「課題探究型のカリキュラム」「課題探究型のリベラルアーツ」を目指すことになった。具体的には、「人間」「文化」「社会」という3つの領域による課題探究型のカリキュラムである。それによって、主題中心、問い中心の探索的な学びを推進するカリキュラムの作成を目指したのである。

そのために、まず従来のカリキュラムにおける8つの専攻科目群を解体して、「人間」「文化」「社会」という3つの領域を設定して、従来の科目をそこに配置する作業を行った。その際、ただ単に科目を並び替えるのではなく、「入門科目」「概論科目」「専門科目」という区分を設けた。従来のカリキュラムでも、「基礎ゼミ」「文献ゼミ」「専攻ゼミ」という積み上げ型のゼミを展開していたが、それらの名称を「入門ゼミ」「探究ゼミ」「専門ゼミ」に改め、各科目（メジャー科目）においても積み上げることを取り入れた。これは「学生が主体的に自分の課題を見つけ、最終的に卒業論文作成という成果を出すこと」をサポートするためである。「入門科目」「概論科目」「専門科目」のそれぞれの位置づけは以下の通りである。

【入門科目】専門的知識なしに、具体的事象を出発点にして学問に触れることに焦点を置いた科目群。

【概論科目】学問の全体像を体系的に伝えることに焦点を置いた科目群。

【専門科目】概論科目で示した学問体系の一部に焦点を置いて解説する科目群。

従来のカリキュラムでは、主専攻 24 単位、副専攻 12 単位という縛りを設けていたが、それをなくして、新たに以下のような縛りを設けた。理由とともに、示しておく。

「入門科目」：3 領域 8 単位

【理由】早い段階でいろんな領域に触れてほしいため。

2 年次終了時までの取得を目安として指導する。

「概論科目」：3 領域 6 単位

【理由】2 年生以上でも 3 領域を学んでもらうため（学びの継続性）。

入門科目からの積み重ね。

「専門科目」：2 4 単位以上

【理由】入門科目と概論科目だけで卒業することを防ぐため。

学生は、ゼミ（入門ゼミ→探究ゼミ→専門ゼミ）での学びを進めるのと並行し、各学年に段階的に配置された科目（入門科目、概論科目、専門科目）を履修することを学びのメインとする。

### 3.2 サポート科目の新設

さらに、メインの学びをサポートするため、外国語セミナー、専門探究に必要な方法論、新プロジェクト科目の内容や構成の再検討を行った。その結果、従来の「外国語セミナー」については、

- ・ 3 年次以上に対する語学学習の機会として外国語セミナーを継続。
- ・ これまでのような専門領域の学びのための外国語文献講読としてよりは、専門での学びに必要な外国語学習をサポートするための科目という位置づけ。
- ・ 外国語を読むという方向性は継続する。

という理念とともに、「外国語プラス」という名称変更を行った。



また、「社会学・メディア」のなかにあった「社会調査関連科目」を、学生の専門的学びをサポートする科目群として取り出し、「研究方法サポート科目」という名称をつけた。具体的には、「リサーチ・リテラシー」「リサーチ・メソッド」「質的研究法」「量的研究法」という4つの科目をそこに配置した。

さらに、従来のカリキュラムから始まった「プロジェクト科目」を新たに「総文プロジェクト」としてリニューアルを行った。今回のリニューアルでは、1年生後期からプロジェクト科目を通して総合文化学科の学びを体験することを目的とした。また、従来はフィールドワークに行くことが必須となっていたが、オムニバス形式の座学のみも含めることにして、多様な教員が担当できる科目とした。

#### 4. おわりに

ここまで述べてきたことをまとめると、次ページのような表になる。

学問分野を積極的に横断することによって、従来の専攻重視型のカリキュラムから、課題探究型の学びにむけたカリキュラム変更を進め、文学部総合文化学科ならではの新しいリベラルアーツ教育を実現したいと考えている。新しく生まれ変わる文学部総合文化学科に対して、変わらぬご支援を賜ることができれば幸いである。

#### 謝辞

今回のカリキュラム改編について、カリキュラム検討委員会の栗山圭子先生、三杉圭子先生、大澤香先生、清水学先生のご尽力がなければ完成しなかったと思います。また、カリキュラム作業部会として、朴秀娟先生、傅喆先生、藤岡達磨先生、岩間文雄先生、景山佳代子先生、桐生裕子先生、北川将之先生、小林隆道先生、栗山圭子先生、奥野佐矢子先生、大澤香先生、佐藤園子先生、田村美由紀先生、戸江哲理先生のお力添えをいただきました。先生方のお力添えのおかげで新しいカリキュラムがスムーズに運用されるようになったと感じております。ここに記して感謝を申し上げます。

	従来のカリキュラム (2024年度まで)	新しいカリキュラム (2025年度から)
科目の分類	<ul style="list-style-type: none"> <li>・8つの専攻科目群</li> <li>・主専攻と副専攻の組み合わせ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3つの領域【人間】【文化】【社会】</li> </ul>
学びの縛り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主専攻24単位、副専攻12単位を履修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入門科目は各領域から2単位ずつで合計8単位以上を履修</li> <li>・概論科目は各領域から2単位ずつで合計6単位以上を履修</li> <li>・専門科目は合計24単位以上を履修</li> </ul>
科目番号と科目名称	<ul style="list-style-type: none"> <li>・100番台が1年生、200番台が2年生などではできているが、科目分類は未実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「入門科目」「概論科目」「専門科目」に分類</li> </ul>
求める高校生像	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やりたいことがまだ見つからない</li> <li>・漠然と学びを深めたい</li> <li>・いろんなことを学びたい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現行のイメージを活用できる</li> <li>・「私は〇〇に興味があります!」と言えるように導く</li> </ul>
メリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専攻科目群がたくさんあるので迷える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現行のメリットを活用できる</li> <li>・自分で学びをデザインできる</li> <li>・リベラルアーツを実践できる</li> </ul>
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主専攻、副専攻の組み合わせが難しい</li> <li>・学びの組み合わせは2つしかないかのように見える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主体性が求められる(自身の興味を見つける負担が大きい?)</li> <li>・(一見すると)何を学ぶのかが見えにくい?</li> </ul>
その他		<ul style="list-style-type: none"> <li>・サポート科目を設置</li> <li>・外国語科目、研究方法サポート科目、総文プロジェクト</li> </ul>

(文学部総合文化学科教授)

# 音楽学部のカリキュラム再編について

松浦 修

## 1. 沿革

神戸女学院は 1875 年（明治 8 年）の創立以来、日本における高等教育の先駆者として多くの分野で貢献してきた。特に 1906 年に私立学校として初めて音楽科を設けたことにより、日本の音楽教育の発展に多大な影響を与えてきた。その後、1949 年の新制音楽学科設置、1952 年の音楽学部認可、2006 年の舞踊専攻設置、2007 年には作曲専攻をミュージッククリエイション専攻へ発展的に改組するなど、時代の変化に応じて教育内容を進化させてきた。

2024 年 4 月から、音楽学部音楽学科は従来の器楽専攻、声楽専攻、ミュージッククリエイション専攻を再編により「音楽表現専攻」へ改組し、音楽教育、音楽ビジネス、生涯教育を専門分野とする「音楽キャリアデザイン専攻」を新たに開設した。これにより、音楽学部音楽学科は二専攻体制となり、新たなステージへと踏み出した。

## 2. 再編に至った経緯

音楽学科は長年にわたり、少人数教育とリベラルアーツ教育を通じて、専門技術と高い芸術的感性を備えた音楽家を育成してきた。その一方で、近年の少子化や社会環境の変化により、大学全体の志願者数が減少傾向にあり、特に音楽学科においては、定員の充足率が低下傾向にあり、安定的な学生数の確保が課題となっていた。

このような状況を受け、音楽学科では伝統を守りつつも、時代に適応した教育改革を検討した。音楽学科がこれまで築いてきた特色ある教育、すなわち少

人数教育やマンツーマン指導を通じた高度な専門技術の育成、高い芸術的感性を養う教育、そして品位の高い人格形成を目指すきめ細やかな指導を土台としつつ、より広範な学生層に対応する体制を模索した。

その結果、2024年度から以下の2専攻体制への改組が決定した。

1. 音楽表現専攻 — 従来の器楽専攻、声楽専攻、ミュージッククリエイション専攻で培ってきた演奏教育を統合し、音楽表現の実践と追求を通じて音楽家・音楽教育者として活躍できる人材を育成する。

2. 音楽キャリアデザイン専攻 — 音楽教育、音楽ビジネス、生涯教育などの分野を対象とし、人や社会に貢献する即戦力となる人材を育成する。

この二専攻体制により、従来の実技教育の枠を超え、応用的な分野でも活躍できる多様な人材を輩出することを目標とした。この改革案は学内外での議論を経て理事会に上程され、2024年4月からの改組が正式に決定した。

### 3. 舞踊専攻の募集停止

舞踊専攻は2006年の開設以来、島崎徹教授を中心に高い教育水準を維持し、定員8名に対し、多くの志願者を集め続けてきた。しかし、島崎教授の定年退職が近づく中で、舞踊専攻の今後についての議論が行われた。後任教員の採用により舞踊専攻の継続を望む声が多い一方で、島崎教授から音楽学科の専任教員数の削減方針や予算削減の制約が厳しい中、これまでの舞踊教育の質を維持しながら発展的に継承することは厳しいとの意見が示され、新たな専攻に注力する必要があるとの結論に至り、舞踊専攻は2024年度入学生から募集を停止することが決定された。

### 4. 学費の改訂

2024年度入学生から「音楽表現専攻」と「音楽キャリアデザイン専攻」の2専攻による教育体制への移行に伴い、2024年度入学生から、以下の通り学費を改訂した。

音楽表現専攻：1,694,000 円（授業料 1,151,000 円、教育充実費 543,000 円）

音楽キャリアデザイン専攻：1,400,000 円（授業料 1,050,000 円、教育充実費 350,000 円）

音楽学部音楽学科の 2023 年度入学生までの学費は 2,014,000 円（授業料 1,371,000 円、教育充実費 643,000 円）であったことから、年額で 320,000 円の学納金の値下げを行い、より学びやすい学費を実現した。学費改訂に伴い、副科実技の個人レッスンを履修できる科目数は 4 年間 8 科目から 1 年間 2 科目へと引き下げられた。一方で、卒業要件外科目として追加で実験実習費を支払うことで、副科実技の個人レッスンを学生のニーズに応じて自由に履修選択できるようになった。

#### 5. 音楽表現専攻の概要

「音楽表現専攻」は、これまでの器楽、声楽、ミュージッククリエイション専攻で培ってきた演奏教育を基盤に、音楽家や音楽教育者として社会で活躍できる人材の育成を目指す。専修領域として「器楽専修」「声楽専修」「ミュージッククリエイション専修」を設け、演奏、歌唱、創作など幅広い音楽表現を追求する教育を提供する。器楽専修はピアノ、チェンバロ、オルガン、弦楽器、管楽器、打楽器、ハープを楽器種とする。個人のレベルに合わせた週 1 回、45 分の質の高いレッスンが提供される他、専門実技の成績優秀者はマンツーマンレッスンを週 2 回受けられる特別プログラム(Artistic Performance Program)を 2024 年 4 月から新設した。これにより、これまで培ってきた実技教育を充実化するとともに、音楽表現の実践と追求を通して、音楽家・音楽教育者として活躍できる人格を備えた人材の育成を目指す。

#### 6. 音楽キャリアデザイン専攻の概要

「音楽キャリアデザイン専攻」は、音楽教育、音楽ビジネス、生涯教育の 3 分野を軸に、応用音楽分野において人や社会に貢献する人材を育成することを目的とする。音楽の社会的価値を探求し、少人数制の 4 年間のゼミを通じてキャリアをデザインする。アクティブラーニングや少人数制ゼミ、PBL（課題解決型

学習)等の先端の教育方法を通じて、学生がキャリアを主体的に学び成長できる教育体制を整えた。さらに、週1回22.5分のマンツーマンレッスンにより、実技教育にも柔軟に対応した。卒業生は地域や企業、教育現場、生涯教育の場で即戦力として活躍が期待される。

## 7. 新カリキュラムの特徴

専攻の再編に伴い、より専門性を高くキャリアにつながる教育体制を掲げ、カリキュラムを大きく変更した。主な特徴は以下の通り。

- (1) 音楽キャリアプログラム 新たに設けたキャリア教育プログラムでは、「ミュージックコミュニケーション講座」「テクニカルライティング」「キャリアコーチング」「音楽文化論」「音楽心理学」「セルフブランディング」「音楽と社会」などの7科目を通じて、音楽を社会で活用する専門性を育てる。また「リトミック」「吹奏楽指導」「音楽教員」「舞台芸術制作」「ピアノ指導」「ミュージックマネジメント」「音楽療法」「生涯学習リーダー」「合唱指導」「ピアノ伴奏」など10の分野別コースにより、多様なキャリア選択を支援する。
- (2) Artistic Performance Program 専門実技の優秀者には、マンツーマンレッスンを週2回受講できる特別プログラムを提供する。
- (3) 地域・企業と連携した学び 2024年3月に兵庫県と締結した包括連携協定に基づき、地域の芸術文化活動に貢献する人材育成を目指したプログラムを展開する。
- (4) PBL(課題解決型演習) 地域企業や自治体と協力し、社会課題の解決策を検討・実践するPBL形式の授業を行う。
- (5) イベント企画制作 イベントの企画や制作を通じて、実践的なスキルを養う。

## 再編の意義

再編により、音楽学部が日本最古の音楽教育機関として培ってきた伝統を土台に、社会の変化に適応した新しい教育体制を目指した。音楽表現専攻では演奏教育の深化を図り、音楽キャリアデザイン専攻では社会貢献を重視した教育を展開する。これにより、より多様な人材育成が可能となり、音楽を通じた社会貢献が一層進むことが期待される。音楽学部音楽学科はさらなる発展と多様性を実現し、未来の音楽家および音楽文化を担う人材を育成する役割を果たしていく。

(音楽学部音楽学科准教授)

## マンザナ収容所関連資料を紐解く

—第5代院長 C.B.デフォレスト先生の第二次世界大戦終局期の活動—

藏中さやか

### はじめに

神戸女学院「中興の祖」、第5代院長 C.B.デフォレスト先生（1879～1973）は大阪の川口居留地で宣教師家庭に生まれ、仙台で暮らした後、帰米して大学卒業後、宣教師として来日した。1905年神戸女学院の教師となり、1915年から院長を務めた。デフォレスト先生の人生は、生涯のすべてを他者に捧げたとも評される。

デフォレスト先生にかかわる資料は、学校法人神戸女学院および同窓会組織である公益社団法人めぐみ会の他、北米のハーバード大学ホートンライブラリー、スタンフォード大学フーバー研究所、スミス・カレッジ史料室等に分蔵されている。それらの資料をもとに詳しくデフォレスト先生の足跡を辿った書が竹中正夫先生の労作『C.B.デフォレストの生涯—美と愛の探求』（創元社 2003年、以下竹中著書と称する）である。その後、デフォレスト先生の書簡については学内研究が開始、継続され、成果報告が重ねられた<sup>①</sup>。

分蔵される関係資料のうち、学校法人神戸女学院所蔵資料として史料室が保管するデフォレスト資料は、デフォレスト文書とも呼ばれ、その中にデフォレスト ファイルとされる一群の資料がある<sup>②</sup>。史料室では1972年ごろから大きく4つに分類してファイリングし目録作成を進め、以後、その内容の一部を本誌にて目録という形で公表してきた。本誌号数順に一覧すると次の通りである。

Vol.19 岡田山関係、 Vol.20 Dedication 関係、 Vol.21 Music 関係、 Vol.23 Kasei-ka 関係、 Vol.25 Bazaar Data 関係、 Vol.26 Dormitory 関係、 Vol.29 Foreign Teaching Applications 関係、 Vol.35 English Play Contests etc.



これまで本誌 8 号分に一部のファイル内の細目を公開しているが、これらはデフォレスト資料中から選り分けたデフォレスト ファイルの一端であり、さらなる整理を待つ状態にある資料が他に多数ある。

本稿では、このデフォレスト ファイルのうち「(グループ 2)」に分類される資料から、第二次世界大戦終局から終戦後、すなわち 1944 年 6 月より 1945 年 12 月まで、デフォレスト先生が直接かかわった日系人の収容所であるカリフォルニア州のロサンゼルスに位置するマンザナ収容所に関する資料について紹介する。関係資料は、強制退去と収容所管理にあたる WRA 関連の資料と、マンザナ収容所で発行された新聞とに二別され、さらにそれら以外の資料が加わる。資料整理は 1986 年ごろに行われたが、それぞれを年次順にファイルに収め、目次を付ける等の基礎作業に留まる。

## 1

1941 年 12 月の日米開戦の後、1942 年夏から 1943 年の間に、カリフォルニア州、オレゴン州等に在住する約 12 万人の日系人が米国籍取得の有無にかかわらず「敵性国人」として、1942 年 2 月 19 日発令の「大統領命令 9066 号」によりそれまで居住していた土地から強制退去の上、10 カ所の収容所に隔離された。収容所は乾燥した砂漠地帯や荒れ地に開設され、収容された人々は不自由で厳しい生活を強いられた。そのうちの一つがマンザナ収容所である。現在、収容所跡地は国立公園局が管理する国定史跡となり、HP や YouTube を通じてさまざまな資料の収集や情報公開等が行われ、バーチャルミュージアムが閲覧可能である (<https://www.nps.gov/manz/learn/historyculture/collections.htm>)。強制収容に対する補償運動や日系アメリカ人コミュニティについてしばしば論じられてきたが<sup>③</sup>、最近では発掘調査や庭園の復元等が進められ、現地での暮らしそのものへの関心も高い<sup>④</sup>。文学研究の側からは「もうひとつの『アンネの日記』」とカバーに記されるジャンヌ・ワカツキ・ヒューストン、ジェイムズ・D・ヒューストン、権寧訳『マンザナールよさらば—強制収容された日系少女の心の記録』(現代史研究会 1975 年) が収容体験と向きあう作品として知られ、収容者の

人生、そして家族や社会を考えさせる材料となっている<sup>⑤</sup>。また写真家アンセル・アダムス、宮武東洋の写真からは、人々の暮らしが垣間見える<sup>⑥</sup>。

日米開戦のため、帰米中であったデフォレスト先生は、このカリフォルニア州マンザナ日系人収容所で 1944 年 6 月から翌 1945 年 12 月の間、カウンセラーとして働いた。当時の活動については、竹中著書第 6 章「マンザナの日々」に詳細、克明に述べられる<sup>⑦</sup>。竹中著書の「あとがき」には、デフォレスト先生の母校であるスミス・カレッジにデフォレスト文書三箱があり、「その一つには、一〇〇頁をこえるマンザナの記録がギッシリ入っていた」と記され、末尾の主要文献のⅡ原資料の中にもマンザナ関係の資料が載るが、第 6 章はこれらをもとに綴られている<sup>⑧</sup>。

竹中著書によれば、デフォレスト先生は、親しい知人から日系人の収容所で日本語のわかるカウンセラーを求めていることを聞き、パサデナで 6 週間の研修を受けたあと、戦時転住局 (War Relocation Authority : WRA、1942 年 3 月開設) が運営するマンザナ収容所で暮らす人々の日常を助け、収容所が閉鎖されるまでの間、勤務した。当初はハーフ・タイム、後にはフル・タイムに近い形であったという。竹中著書は 1 年半のマンザナでの日々を詳しく紹介した後、デフォレスト先生の「マンザナの日々は、限られた時間と空間の中で、多くの異なった背景の人びとと生活を共にしなから、多様な奉仕活動に打ち込んだ独自の体験でありました」と述べる。

その後、学外の研究者である石井紀子が「太平洋戦争と来日アメリカ宣教師—シャーロット・B・デフォレストとマンザナー日系人収容所の場合」(『大妻比較文化』10号、2009) を発表している。同論文は第二次世界大戦前後のデフォレスト先生の活動を勤務したマンザナの収容所での日々を中心に詳論したもので、デフォレスト先生の「マンザナー日記抄録」(Manzanar Journal Entry) という、「約 140 通、計 170 頁余にシングル・スペースのタイプ打ちされた資料」を用いた労作である。

## 2

ここで日系移民資料に目を向けると、国内のコレクションとしては国立国会図書館憲政資料室所蔵日系移民関係資料が知られ<sup>⑨</sup>、一部が国立国会図書館デジタルコレクションでも公開される。また JICA 横浜海外移住資料館にも関係資料が所蔵され、和歌山市民図書館には移民資料室が設置され関係資料を収集する。神戸の海外移住と文化の交流センターは 1928 年設立の国立移民収容所を継承し、特にブラジル移住者に関する施設として現在も「希望と未知への船出の広場」(移住ミュージアム) という展示スペースをおいている。が、いずれもマンザナ収容所のみ重点を置くものではない。

WRA 関連資料は戦時中の「在米日系移民強制隔離の全容を明らかにする史料」として Chadwyck-Healey/ProQuest-US-がマイクロ資料“Records of the War Relocation Authority 戦時転住局文書”として集成する<sup>⑩</sup>。同資料には

### A. Field Basic Documentation, 1942-1946

収容所に関する基本史料・公式報告、新聞切り抜き、収容所内の新聞、書簡、各種報告書、組織表、公的・私的刊行物、スピーチ等。日系人コミュニティにおける強制移住に対する反応、一般市民の日本人に対する感情、収容所での日々の営み、収容者の法的問題、医療、教育、農業、安全等を伝える文書。

### B. Headquarters Security : Classified General Files 1942-1946

収容所の治安維持に関する政府内文書 (アルファベット順)

### C. Headquarters Subject : Classified General Files 1942-1946

WRA の機能と方針に関するあらゆる資料 (事項別)

が収められる<sup>⑪</sup>。A を所蔵する早稲田大学図書館 HP 記載の内容紹介には「現地の収容所から WRA 本部に送られた、毎月の報告書・書簡・新聞記事などが含まれており、収容政策や収容所生活等の全貌を明らかにしようとするもの」と記される<sup>⑫</sup>。

デフォレスト ファイル (グループ 2) の WRA に関する資料は次のファイル「1」～「6」である。

	ファイル名	点数
1	War Relation Authority	29
2	War Relation Authority Bulletins etc.	31
3	War Relation Authority (California)	48
4	War Relation Authority	33
5	War Relation Authority	26
6	Miscellaneous Papers Re Relocation and the War	44

それぞれにタイプ打ちの公文書や転住関係のパンフレット、手紙等を収める。資料の状態は良好で、公的な記録からは WRA の果たした役割や収容所の位置付けやその中での人々の日々の暮らしの維持管理等がうかがえる。また転住促進のためのパンフレット等には移民として暮らした人々が生きる土地の風土や特性が紹介され、生活はもちろんその当時の日系人の生き方そのものを現代に伝える資料となっている。今後、公開されている資料との照応等の作業を進め、その資料的価値を明確にする必要がある。

### 3

第二次世界大戦中、全米各地の集会所や強制収容所では、収容された日系アメリカ人によって新聞が発行されていた。アメリカ議会図書館のデジタルコレクション「日系アメリカ人強制収容所新聞 1942 年から 1946 年」の中にはマンザナで発行された新聞を「マンザナー・リロケーション・センター・アドミニストレーションの公式出版物とマンザナー・コミュニティ・エンタープライズの新聞」として 373 点を収める<sup>⑬</sup>。

マンザナ収容所では、英語版、日本語版の新聞が発行されていた。同デジタルコレクションの解説には「1942 年 4 月 11 日、最初の排除命令から 1 ヶ月も経たないうちに、マンザナー・フリー・プレスはカリフォルニア州インヨー郡のマンザナー・リロケーション・センターで出版を開始した」とあり、マンザナで発行された新聞は収容所で刊行された新聞として最初のものであったこと

が記されている。

ファイル「9」～「14」には、デフォレスト先生が現地で収集し本学に託した日英両版のマンザナ収容所で発行された新聞 Manzanar Free Press (英語版)、フリープレス (日本語版) が保管されている。所蔵状況は以下の通りである。

・英語版

	ファイル名	点数	内容
9	Manzanar Free Press I	42	Vol.5, No.51～No.52 (June 24.1944～June 28.1944)、Vol.6, No.1～No.40 (July 1.1944～November11.1944)
10	Manzanar Free Press II	50	Vol.6, No.41～No.90 (November 15.1944～May 2.1945)
11	Manzanar Free Press III	40	Vol.6 No.91～No.107 (May 5.1945～June 30.1945)、Vol.7, No.1～No.13 (July 4.1945～August 18.1945)、Vol.15 No.7, No.21 (September 1, 5 1945)、Vol.16 No.1～7 (September 8～October 19, 1945) と Red Cross 1944 April 1 点

タイプ打ち印刷物とタブロイド版とが隔号で刊行され、法量はそれぞれ一紙 35.5×21.5 cm、40.5×28.0 cm である。

Manzanar Free Press I の Vol.5, No.52 (June 28. 1944) には“DĚ FĚOREST AUGMENTS WELFARE STAFF”という見出しでデフォレスト先生の紹介記事が載る。その全文は以下の通りである。

Charlotte B. DeForest has been added to the community welfare staff as junior counselor, revealed the welfare section. Her job will consist of interviewing and counseling evacuees and their families to help formulate future plans.

Daughter of a missionary, Miss DeForest was born and reared in Osaka, Japan.

After teaching for ten years on the faculty of the Kobe College for Girls, she served as president of the institution for 25years.

#### REASON OF RETURN

Due to serious illness, she returned to the United States in 1940. Until her appointment here, she has spent much of her time doing translating and interpreting work for the Immigration Service in Boston, Mass., and teaching the Japanese language at a army service training unit.

She has met many of her old friends of Japan in Manzanar, and looks forward to her stay here with great pleasure.

#### ・日本語版

	ファイル名	点数	内容 〔〕内は欠号
12	フリープレス I	32	第 5 版 48、49、51 号 (1944.6.21、6.24、7.1)、 第 6 版 2～30 号 (1944.7. 5～10.11) とルイジ アナ州ニューヨーク州就職口
13	フリープレス II	45	第 6 版 31～50 号〔内 42 号欠〕(1944.10.14～ 12.23)、新年特別号 (1945.1.1)、52～88 号 〔54、56、57、61、63、69～72、75、77、79 号 欠〕(1945.1.6～5.12) とマンザナ再転住部報 1- 1-4
14	フリープレス III	33	第 6 版 89～102 号〔内 99 号欠〕(1945.5.16～ 6.30)、第 7 版 1～20 号〔内 13 号欠〕(1945.7.4～ 9.8)「産業界へノ躍進 企業ト就職ノ好機 会」、Manzanar Red Cross (1944.4.15)

日本語版は、ガリ版刷両面印刷でほぼ 4 日ごとに刊行され 1 号につき 2 枚、法量は一紙 35.5×21.5 cm、III の 194 号以降 30.2×22.8 cm である。

同紙のデフォレスト先生にかかわる記事は以下の通りである<sup>④</sup>。

- 1) 見出し「タウンホール、ニュース」(フリープレス I 所収の第 6 版 10 号  
1944.8.2 発行)

去る火曜日、区支配人及び日本語教師達集会の席上、アダムス夫人はセンターでの日本語教授法則に就いて説明した。

八月一日より日本語の個人教授及び区主催の日本語学校は一切許されぬ。現在の教師及び生徒は直ちにタウンホールか教育部で登録せねばならぬ。

以後日本語教授は曾て神戸女学院の教師であつた、デフォレスト博士監督下に行はれる。

2) 見出し「デフォーレスト嬢の希望」(フリープレス I 所収の第 6 版 30 号 1944.10.11 発行)

当マンザナ社会部(一~四~三)のデフォーレスト嬢は日本生れで、教師として在日三十五年、米国育ちの二世や在米生活の長い一世が恐入るような日本語を使はれる。このデフォーレスト嬢は、同志社女学部、大坂梅花女学校、神戸女学院、松山女学校等の学校に曾て<sup>(マ)</sup>学び或は卒業生が当マンザナ住民の皆様の中にあるならば、是非お目にかゝつてみたいと希望してゐる。

日本語版には、現地での生活情報や転住にかかわる記事の他に、日本のできごとや戦局を報じる記事も多く、どのような情報が現地にもたらされていたのかを如実に知ることができる。例えば、終戦後の第 7 版 20 号 1945.September.8 には「帝国第八十八臨時議会開かる」の見出しで、9 月 4 日開会の帝国議会の記事が載り、「廣島の惨状」の見出しで「クラク、リー」という名を付した広島への原爆投下に関連する記事が載る。現地の生活情報に加え、英字紙の翻訳による政治、社会に関連する時事問題の報道の分析等も含めた今後の研究がまたれる。

さらに関連する資料を収める「15」「16」のファイルがあり、その内容は次の通り整理されている。

15 Manzanar Programs etc. 75 点

書類 (26.5×20.0 cm、27.5×21.5 cm、28.0×21.5 cm)、他メモ、チラシあり

16 Church Programs and Reports Manzanar 32 点

書類 (28.0×21.5 cm)、パンフレット (27.5×21.5 cm)、週報 (35.5×21.5 cm)

「15」には 1945 年 6 月 2 日開催のマンザナ高校の卒業式のプログラムやコミュニティで 1945 年 4 月 20 日に開催されたスピーチコンテスト、1944 年 11 月 24, 25 日に開催された「日本演芸の夕」という催事のプログラム、1945 年の MANZANAR RED CROSS の刊行物、1945 年 4 月 29 日にマンザナ公会堂で開催された追悼会の次第の他、EDUCATION SECTION SUMMARY や 1944 年夏の ACTIVITIES PROGRAM 等が含まれる。

「16」はマンザナ基督教会の活動にかかわるものを一括したファイルで、1944 年 9 月から翌年の 10 月までの Church Program 8 点や 1945 年の週報 3 点、1944 年から 1945 年の会計報告 6 点等を含む。

いずれも保存状態は良好で、当時の日常や信仰を守った人々の姿を伝える資料である。

## まとめ

本稿では、デフォレスト ファイル (グループ 2) よりその内容の一部を紹介した。いずれも貴重な資料であり、資料精査を含む学内研究の開始と今後の関連研究分野の進展が待たれる状況にある。日英両版の“Manzanar Free Press”はもちろんであるが、現地の教会活動、教育活動を伝える資料等、マンザナ収容所が閉所するまでの日々を追うことのできる豊かな情報の資料的価値は極めて高い。このうち日本語版である『フリープレス』については、現在公開準備を進めている神戸女学院デジタルアーカイブズ(仮称)に収録し公開する予定である。

第二次世界大戦終戦から時が経ち、世界の中の日本を巡る状況も折々に変容している。日米の間で平和を希求し続けた第 5 代院長デフォレスト先生の志と活動とを今に伝え、その想いを今一度胸に刻みたい。

## 註

- ① 津上智実編『C.B. デフォレスト書簡の解説』I-VIII、神戸女学院大学「宣教師文書」



研究会、2016-2022。

- ② デフォレスト文書、デフォレスト資料は同意に用いられ、デフォレスト ファイルは史料室において特に区分してファイルに収めた資料群を指す。
- ③ 岡部一明『日系アメリカ人強制収容から戦後補償へ』（岩波ブックレットNo.284 1991年12月）、竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティー強制収容と補償運動による変遷—』（東京大学出版会 1994年）等参照。
- ④ 秋山かおり「マンザナー国立史跡日本庭園の復元プロジェクトから知る日系人抑留者の暮らし」（『立命館言語文化研究』35(2), 2024年1月）参照。
- ⑤ 桧原美恵「日系アメリカ文学（戦後…本土）—表象としてのマンザナールをめぐる—」（『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』（世界思想社 2011年）等参照。
- ⑥ 映画『東洋宮武が覗いた時代』（2008年製作）、「カリフォルニア州が謝罪した日系人強制収容所「マンザナー」と移民」（<https://globe.asahi.com/article/13249096>）参照。
- ⑦ その内容は NHK アナログ教育「こころの時代～宗教・人生」の「国籍は天にあり」（2006年12月24日放映）でも取り上げられた。
- ⑧ 本誌第37号掲載の「竹中正夫のC.B.デフォレスト研究を顧みて」にてご令室竹中百合子様から竹中正夫先生のデフォレスト研究とその調査についての詳細を記されている。
- ⑨ <https://ndlsearch.ndl.go.jp/rnavi/emigration/>参照。
- ⑩ その原本は National Archives and Records Administration が所蔵する。
- ⑪ 紀伊國屋書店「Records of the War Relocation Authority について」（<https://www.kinokuniya.co.jp/03f/denhan/umimicro/war.htm>）より引用。
- ⑫ <https://www.wul.waseda.ac.jp/CLIB/MICRO/tenjyu.html>より引用。
- ⑬ <https://www.loc.gov/collections/japanese-american-internment-camp-newspapers/about-this-collection/>参照。なお米国議会図書館が所蔵する日系人の収容所で発行された新聞をマイクロ資料とし収録する「Japanese-American Relocation Camp Newspapers: Perspectives on Day-to-Day Life 日系アメリカ人収容所発行新聞集成」（センゲージラーニング株式会社 Gale 事業部）もある。
- ⑭ 英語版、日本語版に計3カ所のデフォレスト先生関係記事が載るが、いずれの箇所にも資料整理時のものと思われる付箋、葉が残る。

〔付記〕資料点数の確認には佐伯裕加恵氏のご助力を得た。記して感謝申し上げます。

（大学図書館（史料室）長）

## 未来へとつながっていく神戸女学院の姿

### —神戸女学院創立 150 周年記念展示 II 報告—

2023 年度開催の神戸女学院創立 150 周年記念展示 I「C.B.デフォレスト展—愛と美を求めて—」に続く記念展示 II は、キャンパス移転 90 周年を記念する「神戸女学院のヴォーリズ建築—Beauty Becomes a College—」であった。2024 年 5 月 21 日から 7 月 11 日まで図書館本館 1 階ホールと 2 階閲覧室において開催され、学内外から 2,285 名の来場を得て、好評のうちに終了した。

5 月 21 日、展示開催に先立ち、11 時 20 分から図書館本館 1 階ホールにおいてオープニングセレモニーが開催された。出席者は来賓 13 名に加えて学内外関係者、教職員を含めて 51 名であった。ホールに置かれている展示物の隙間を縫うような形で参加者はテープカットが行なわれる階段の方を向いてセレモニーに立ち会った。

長谷川紹子学長室課長の司会の下、中野敬一学院チャプレンによって聖書(ヨハネによる福音書 8 章 32 節)が朗読され、学院成長の感謝とこれからの歩みへの願いを込めて祈禱が捧げられた。司会者から来賓 13 名の方々について、それぞれの関係の説明も加えての紹介に続いて、飯 謙院長の挨拶があった。

神戸女学院の校舎は似ているけれど個々に違う。その異質なものを回廊がつないでいる。異なるものが一つとなる。これがキリスト教の精神である。神戸女学院のキャンパスは建学の精神を学ぶものである。創立 150 周年を控えて、もう一度キャンパスがさらに生きていくように、この展示が建学の精神をさらに深めるきっかけとなり、新しいものと出会う転機となるようにと願っている。

次に、藏中さやか図書館長から展示品の紹介があった。特に初公開となる音楽館の彩色画は、ヴォーリズの音楽への思いが特別であったことが窺えるものである。

そして院長、館長、来賓代表の株式会社日建設計・大澤 智氏によるテープ

カットが行なわれ、黙禱をもってセレモニーは終了した。

この後來賓の方々は、図書館員の説明を受けながら、ホール、閲覧室の展示を見学した。

株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所、公益財団法人近江兄弟社、株式会社竹中工務店、株式会社日建設計、公益社団法人神戸女学院めぐみ会の特別協力を得て開催された本展は、移転当時 17 棟あったヴォーリズ校舎のうち現存する 12 棟（重要文化財）について設計者ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（William Merrell Vories）による建築図面を中心に、創立 150 周年を迎え、未来へとつながっていく神戸女学院の姿を伝える展示となっている。

1 階ホールにはプロローグとして山本通旧キャンパスと移転当時の岡田山キャンパスの模型を展示している。2 階閲覧室の展示は 8 部構成となっており、それぞれ旧キャンパス、幻の大蔵谷キャンパス、ヴォーリズ、貴重な原図による重要文化財のキャンパス、式典関連資料、震災、そしてこれから出来る新しい校舎をテーマにしており、過去だけでなく、生まれ変わるキャンパスも紹介している。最後には映像コーナーも設けている。

現在キャンパスでは、正門の修復工事と新校舎建築が進行している。創立 150 周年には創建当時の正門と共に新しいキャンパスの姿が見られる予定である。展示では目で見える形で神戸女学院の歴史を立体的に感じていただけたのではないかと思う。また、株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所のご厚意による原図の出品は特に注目に値するものであり、来場者のうち学外者が 7 分の 6 を占めていたということを見ても、それを目当てに来場された方も多かったのではないかと推測される。

（佐伯裕加恵）

# 神戸女学院史料室所蔵文書目録

## デフォレスト ファイル

富岡ひとみ

以下は『学院史料』第 19 号から第 21 号、第 23 号、第 25 号から第 27 号、第 29 号から第 31 号、第 35 号から第 36 号に発表した、第 5 代院長シャーロット バージス デフォレスト先生が残されたファイルの目録の続きである。本号では B で始まる様々な項目を含む 1 冊のファイルの中身を紹介する。

## デフォレスト ファイル (13)

### BATES

整理番号 (史料単位)	年月日	タイトル	枚数
1	33.11.15.	DeForest 信 Drs.Bates 宛。〔Mr. Kaji Watanabe の履歴書の送付及び紹介、タイプ。〕	1

### BALBOA DAY

1		Service Bulletin for September. 〔WORK BOOK、チラシ、印刷物。〕	1(2)
2		名刺。〔CLARE E. LEONLD.〕	1
3	31.	Balboa DAY. 〔バルボアについて、手書きメモ。〕	1
4	27. _____	太平洋の発見者 バルボア—BALBOA, DISCOVERER OF THE PACIFIC. 〔冊子、表題のみ邦文、印刷物。〕	3
5	30. _____	BALBOA, DISCOVERER OF THE PACIFIC—太平洋の発見者 バルボア。〔和英両用の冊子、4 と同じ内容、印刷物。〕	1

### BLAISDELL

1		President Blaisdell Is Honored by University. 〔新聞切り抜きを 2 枚張り合わせたもの、印刷物。〕	1
---	--	--	---

- |   |          |  |   |
|---|----------|--|---|
| 2 | 31.8.14. | James A. Blaisdell 信 Dr. DeForest 宛。〔Mrs. Blaisdell の病気による予定変更の件、タイプ。〕<br>signed James A. Blaisdell.   | 1 |
| 3 | 31.9.9.  | C. B. DeForest 信 Dr. Blaisdell 宛。〔2 の書簡に対する返信及び Miss Yamanaka のこと、タイプ。〕  | 1 |
| 4 | 28.7.10. | C.B. DeForest 信 President Blaisdell 宛。〔Miss Yamanaka のこと、タイプ。〕   | 1 |
| 5 | 27.1.16. | Hilda M. Gardner 信 Miss DeForest 宛。〔Miss Scripps の病気のこと及び近況について、左上部に書き込みあり、copy、タイプ。〕  | 1 |
| 6 | 27.1.12. | C. B. DeForest 信 Doctor Blaisdell 宛。〔7 の書簡に対する返信、タイプ。〕   | 1 |
| 7 | 26.12.9. | James A. Blaisdell 信 Miss DeForest 宛。〔詳細についての報告、Miss Scripps と Scripps College 及び Blaisdell との関係、Miss Scripps の financial adviser のこと及び DeForest の助言について、タイプ。〕<br>signed James A. Blaisdell. | 1 |

#### BRAZIL

- |   |           |  |   |
|---|-----------|--|---|
| 1 | 29. _____ | Brazil Exhibition, Dec.1-5, 9-4p.m. 1929. 〔ブラジル展について、手書きメモ。〕 | 1 |
|---|-----------|--|---|

#### BUIDING COMMITTEE

- |   |            |  |   |
|---|------------|--|---|
| 1 |            | 合名會社竹中工務店名刺。〔左側にデフォレスト様と記入あり。〕   | 1 |
| 2 | 1930-1931. | Christmas & New Year. 〔竹中工務店のクリスマスカード、印刷物。〕  | 1 |
| 3 | 31.2.6.    | C.B.DeForest 信 Mr. Takenaka 宛。〔Junior College 受験のこと、手書き追伸あり、タイプ。〕 signed C.B.DeF.                      | 1 |
| 4 | 31.2.4.    | T. Takenaka 信 DeForest 宛。〔娘の入学希望について、タイプ。〕 signed T. Takenaka.   | 1 |
| 5 | 30.3.18.   | T. Takenaka 信 <sup>ママ</sup> Mr. C.B.DeForest 宛。〔自宅での small dinner party への招待、タイプ。〕 signed T. Takenaka. | 1 |

#### BUILDING CAMPAIGN

- |   |              |  |      |
|---|--------------|--|------|
| 1 | 28. _____    | For Building Fund, Kobe College, Kobe, Japan.<br>〔Kobe College Corporation による寄附の依頼及び寄附の内容についてのカード 2 通、印刷物。〕             | 1    |
| 2 | 28.11. _____ | Kobe College Corporation American Heasquarters 信 the Board of Directors 宛。〔the Campaign for Building Funds の状況について、タイプ。〕 | 1    |
| 3 | 26.12. _____ | The Kobegram Vol.I No.3. 〔KCC 発行、新聞 1 枚も<br>の表裏 4 頁、3 部あり。〕  | 1(2) |

- 4 Here's the Thermometer Kobe Women are Anxiously Watching!. [神戸女学院について及び寄附の状況、KCC 発行パンフレット、2 色印刷、2 部あり。] 2
- 5 26.4. — Charlotte B. DeForest 信 American Friends 宛。[いくつかの質問についての回答、タイプ。] signed Charlotte B. DeForest. 2(3)
- 6 28.2.20. Chrlotte B. DeForest 信 Friends 宛。[建設基金キャンペーンのこと及び日本政府による教育制度改革、普通選挙導入について、タイプ。] signed Charlotte B. DeForest. 1(2)
- 7 30.3.10. THE NEW KOBE COLLEGE SITE. [Statement by H. W. Hackett and C. B. DeForest、タイプ、コピー。] 1(2)
- 8 MAP SHOWING THE NEW KOBE COLLEGE SITE. [神戸市街地の手書き地図、7 の添付資料と思われる、コピー。] 1
- 9 チラシ。[KCC 発行のチラシ、寄附について、2 部あり、印刷物。] 1
- 10 29. — The New Challenge! [KCC 発行のチラシ、2 部あり、印刷物。] 1(2)
- 11 30. — LIBRARY BUILDING KOBE COLLEGE KOBE, JAPAN. [KCC 発行の LAYOUT OF NEW KOBE COLLEGE PLANT のチラシ、3 ツ折り、カラー印刷。] 1
- 12 Kobe College is famous for its. [神戸女学院紹介のチラシ、印刷物。] 1
- 13 Information Memoranda Kobe College Corporation Expansion Campaign 1927-1928. [神戸女学院募金活動のための冊子、表紙左肩に書き込みあり、印刷物。] 1
- 14 KOBE COLLEGE, JAPAN. [Kobe College の新校舎建設の必要性及び寄附について Eva B. A. Macmillan によって書かれた記事、タイプ。] 1(2)

#### BUILDING MATTERS AND SCHOOL ORGANIZATION

- 1 34.3.13. Gennosuke Kishima 信 Miss Deholes 宛。[学院の水流の不具合と修復について、書き込みあり、タイプ。] signed G. Kishima. 1
- 2 34.3.15. Charlotte B. DeForest 信 Mr. Kishima 宛。[水流の不具合の対応について、タイプ。] 1
- 3 33.9.13. Harold W. Hackett 信 THE KOBE COLLEGE MISSIONARY TEACHERS 宛。[岡田山へのアクセス及び費用について、左肩に Miss DeFoerst と書き込みあり、タイプ。] signed Harold W. Hackett. 1
- 4 33.4.13. C. B. DeFoerst 信 Mr. Hackett and Miss G. Stowe 宛。[専門部受付の人員配置について、タイプ。] 1

## BUSINESS COURSE

- |   |   |      |
|---|---|------|
| 1 | Business Course. [Business Course の 1935-1938 年の費用についての手書きメモ 4 片。]  | 1(4) |
| 2 | 昭和7年9月27日 シ、ビ、デフォレスト信 同窓生宛。[實業科目の講習會開催の案内状、邦文印刷物。]  | 1(2) |
| 3 | 32.10.1. CLARENCE GILLETT 信 Miss DeForest and Mr. Hackett 宛。[實業科目講習會における講師について、Mr. Miura のこと、タイプ。] signed Clarence G. | 1(2) |
| 4 | 32.9.22- Business Koshukai Com. [Business Course について 27. の手書きメモ 4 片。]  | 2(4) |
| 5 | 32.9.22. PROPOSED BUSINESS TRAINING COURSE REVISED. [Business Course 規則改訂について、右上に As approved と記入あり、タイプ。]             | 1    |
| 6 | 32.9.20. Re Business Course. [Business Course 開設決議、上部に Trustees' vote と書き込みあり、タイプ。]                                   | 1    |
| 7 | 32.9.19. T. Yasuda 信 Miss C. B. DeForest 宛。[Business Training Course についての報告書、タイプ。] signed T. Yasuda.                 | 2(2) |
| 8 | 32.9. _____ Proposed Business Training Course. [Business Training Course についてのいくつかのプラン、コース内容及び収支関係等、訂正加筆あり、タイプ。]      | 3(5) |
| 9 | 講習會學科目。[上記 8 と同じ内容の邦文、一頁目上部に委員会ニ於テ修正ノ上第四案採用と記入あり、邦文手書き。]  | 3(5) |

---

『学院史料』第 38 号

2025 年 4 月 1 日発行

編集 史料室専門委員会

発行 神戸女学院史料室

〒662-8505 西宮市岡田山 4-1

---



# GAKUIN SHIRYO

2025. 4. Vol. 38.